とある無敵の法則解析《アナリーロウ》

マセリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある無敵の法則解析（アナリーロウ）

【Ｎコード】
Ｎ６４６７Ｗ

【作者名】
マセリ

【あらすじ】
一人の少年が“とある魔術の禁書目録”の世界に転生した。
幼馴染は垣根帝督。クラスメートの上条当麻とは親友で、絹旗最愛という義妹が居る。
とてつもない環境だが、彼の一番の問題はその超能力。
“法則解析”……この世の法則を捻じ曲げるＬＥＶＥＬ５で、序列は最強の第零位。
そんな彼の過ごす日々を、ここに綴ろう。

001　転生

気がつくと液体に満たされた空間に居た。

「……はぁ！？」

と言おうとしても声が出ない。何がおきているのかさっぱりだ。

いつものように学校へ向かうため、玄関の扉を開けたはず。それが急に暗転して気がつくと真っ暗闇なのは随分と世話がない。どういうことかもさっぱり分からず、その液体に満たされた空間でしばしの時を過ごした。

『聞こえているかな……？』

あん？　なんだ？

『聞こえているようなら何よりだ藍藤静那君（あいとうしずな）』

誰だ……テメェ。

脳内に直接響くような声。まあ当然だろう。俺は今、液体の中にいるのだから。

『簡潔に述べれば、神の如き者だな』

それなんてフィアンマ？

『む。そのツッコミが出てくるようなら問題はないのかもしれないな』

声が少し楽しそうなトーンに変わる。
ていうか、アンタも知ってるのか。禁書。

『あぁ、知っているさ。さて、与太話はこのくらいにして、君の状況を話そう』

！　アンタ俺の状況知ってるのか。

『そりゃ知っているさ。私がこの状況にしたのだから。……とりあえず簡単に。君は転生したのだよ』

転…生……？
ってアレか？　意識持ったまま別の人間になるってヤツか？

『まぁ、そんなところだ。君は、とある魔術の禁書目録の世界に生まれ変わることになったのだ』

禁書の世界に！？　なんでまたそんな……。

『いやぁ、君ほど元の世界に幻滅している人間を見ているのもいろいろと切なくてね。どうせなら楽しい世界へ飛ばしてやろうと思ったのだよ』

驚いた。いや……正確には感謝のあまり声も出ないってヤツか？
……現実世界には確かに辟易していたからな。まさかとは思うが転生などとは恐れ入った。

『感謝の言葉はありがたく受け取っておこう。君があの世界に行けば面白いな、と私も思っていたからね』

禁書の世界か。楽しみだ。

『おっと、そろそろ時間がない。もうそろそろ出産だろうから、私はお暇するとしよう』

は？　出産！？

と思ったのと同時に、俺は世界に生を受けた。

００２　幼少時代（前書き）

駄文ですが、お付き合いください。

００２　幼少時代

驚くことに、俺の名前はそのまま変わらなかった。
藍藤静那（あいとうしずな）……先に言って置くが、俺は男だ。
現在、この世に生を受けて六年になるのだが、その間に両親から得た情報を並べると。
間違いなくここは禁書目録の世界。学園都市は存在し、超能力や超科学と言った単語も時折耳にする。
ついでに言っておくとここは学園都市ではないらしい。比較的近い場所ではあるようだが。

さて、そんなところで、ひとまず現在の状況を纏めよう。
・俺が知っている禁書の世界の物語は、まだ始まっていない。
・原作は一通り読んだから、先の展開は読める。
・当然、今の俺に能力はない。
・驚いたことに、俺は元の世界での六歳のころの容姿とほとんど変わらない。

こんなところか。
ところで、なんで原作の物語が始まっていないか分かるかというとだが……。

「しずなーーーーー！」
「よう、帝督」

垣根帝督、という幼馴染が居るからだ。
茶色というよりもはや金髪に近い地毛は、俺とくっつくとより目立つ。なんせ俺が漆黒の髪だからな。

「小学生になったらさ、しずなは学園都市に行くのか？」
「う～ん、俺は行かないと思うな。お母さんが許さないと思うし」
「そっかー。んじゃ俺も行かないや」
「帝督もか？」
「うん。だって、しずなと超能力で戦えないし」

……待て。貴様はＬＥＶＥＬ５の第二位だぞ。戦わせるつもりか俺を。

「じゃあ、中学から行こう」

帝督はそう言って笑った。そうだな、中学なら流石に許してくれるかね……？

００２　幼少時代（後書き）

はい、短く済ませます。学園都市に行ってから、長文になると思います。
ちなみに、名前の挙がったお母さんですが、出てきません。
というかもう、次から学園都市……ようは中学生です。

００３　身体検査（前書き）

学園都市編、スタート！

００３　身体検査

小学六年の三月。帝督も俺も、かなりの問題児として学校の先生から睨まれていた。
そんなことお構いなしに今日も給食のワゴンでレースゲームを展開し、放課後の校長室行きが決定している。

「やらかしたな静那！」
「お互い様だろうが」

ＨＲが終わり、放課後。校長室に行くこともなく、夕暮れの教室……俺の席で帝督と笑いながら話す。
窓側後ろから二番目の俺に、後ろから三番目の帝督は席をまたいで向き合っていた。

「ところでよ」
「あん？」
「卒業したら、学園都市行きだな」

帝督よ……こちとら生まれて１２年、それが一番楽しみだったんですぜ。

「楽しみだよな」

俺が笑うと、帝督も返した。
コイツとは本当に思考回路が似ていて嬉しい。ケンカも沢山したけれど、それ以上に深くて強い絆があるような気がした。
帝督が続ける。

「超能力はとりあえず欲しいよな」
「おう。ＬＥＶＥＬ０にはなりたくないね……」

っつっても、お前はＬＥＶＥＬ５なんだけどさ……第二位なんだけどさ……。

「？　どうしたそんな打ちひしがれたような顔して」
「いや……ところで帝督はさ、どんな能力が欲しい？」
「ん？　そりゃ……」

顎に手を当てて暫し考え始める帝督。コイツのことだからとんでもないこと言いそうなんだけど。

「俺は……とりあえず本当に“自分だけの現実”が欲しい。誰とも同じじゃない……自分だけの」

ワンオフアビリティか。カッコイイこと言うじゃねぇか。
そういうお前は？　と聞き返す帝督に、俺も少し考える。どんな能力が欲しいのだろうか。やっぱり、負けたくないよな。帝督にも、まだ見ぬ第一位にも。だとすると、やっぱりワンオフアビリティであることは必須条件だろう。

「この世界をひっくり返してみたい……かな？」
「はぁ！？　それは能力で、か？」

驚いた顔の帝督。……あぁ違う違う。

「本当にひっくり返すんじゃなくて、常識を覆す的な」
「常識を……覆す」

俺が笑うと、帝督はなにやら呟いた。ついで、物凄く良い笑顔で俺を見る。

「いいな！　それ！　常識を覆す！　俺と静那で、学園都市を打ち破るような能力得て……“最強の二人組”になろうぜ！」

「……！」

最強の二人組か。カッコイイな。俺の能力さえ、強ければ。帝督と二人で、学園都市でやりたい放題できるかもしれねぇ。

「よっしゃ！　決まりだ！　俺と帝督で、学園都市の最強になるぜ！」

「おっしゃあ！」

と、叫んだ瞬間に教室の扉が開く。

「テメェら、校長室に来い」

「「……はい」」

@

晴れて俺たちは卒業した。今は、学園都市に向かうバスの中だ。

「帝督」

「なんだよ静那」
「服は持ったか？」
「あぁ」
「勉強道具は？」
「あぁ」
「歯磨きは毎日するのよ？」
「お母さんかお前は！？」

と、帝督にダル絡みの真っ最中。というのもさ。

「……長い」

学園都市に入る検閲みたいなのが、偉く混雑しているのだ。
予定ではもう学園都市内のホテルに荷物を置いているはずなのに。

「今日の予定ってどうなってんだっけ？」

帝督の持っているパンフレットを覗き込む。

「……このあとはホテルに荷物を置いてから、身体検査（システムスキャン）だな。やっと能力が分かるぜ」
「そうか。もう能力がわかるんだな」

感慨深く窓の外を眺める……車ばっかりだ。風情がない。
帝督にちょんちょんと肩をつつかれる。

「……どした？」
「いや、このバスに乗ってんの、うちの学校出身ばかりだなと思って」
「そりゃ、うちの地区から出発したバスだからな」

「……なんか自信なくなってきたよ」
「はぁ？」

どういうことだ？　俺が問いかけると、ため息交じりに帝督は答えた。

「ここに居る全員でも、一つの小学校出身に過ぎない。学園都市の学生１８０万人の多さが少し分かってさ。その中で最強なんて、本当になれるのかと、な」
「……なるほど。でも、自分を信じてみるほうがいいんじゃねぇの？　今のところ学園都市のＬＥＶＥＬ５は多くはないけどさ……だからといって可能性がないわけじゃない。宝くじも買わなきゃあたらねぇって」
「そうか、そうだよな」

少し落ち着いたのか、微笑む帝督……お前。

「その笑顔、絶対女の子に見せるなよ？」
「は？　なんでだよ！　なんですか？　俺はデススマイルなんですか！？」
「それでいいからやめとけ。……収集がつかなくなるぞ」
「なんでそんな真剣なんだよ！？　俺の顔の造形に何か問題が！？」
「問題が無さ過ぎるから問題ｎ……いや、そう問題大有り」
「今何か言いかけたよな！？　問題大有りってひどくね！？」
「うるせぇよバレンタイン３０個もチョコ貰いやがって！」
「お前だって２０個近く貰ってただろうが！」
「俺はチョコ好きじゃないから問題ない」
「どんな理論だよ！？　もはや屁理屈でもねぇよ！」
「……はぁ、帝督はいつからこんな細かい男に」
“成り下がったよ失望しました”みたいなこと言ってんじゃねぇ

よ！」
「……みんなが注目してるよ？　ついでに俺は小声だから、帝督が一人で怒鳴っているように見える」
「！？　こんのヤロォ……よほど愉快な死体になりてぇと見える……！」
「愉快な死体ってなんだよオイ……お？」
「ん？」
「学園都市の中、入ったぜ」

学園都市内に入ると、何もかも見違えていた。街並みも美しく、超科学の産物という噂も素直に頷ける。

「おい静那！　なんだよあれ！」
「……自走しているみたいだな」
「ゴミ箱……か？」
「自走するゴミ箱……メリットがあんまり見当たらないけど」

そんなことを言いあっていると、まもなくバスは停車した。

『皆様、学園都市へようこそ。バスを降りてホテルに荷物を置き、またここに戻ってきてください。発車は１０分後になります』
「降りるか」
「おう」

俺たち二人も、子どもの集団に混じってタラップを降り、スーツケースを引き摺りながらホテルに入る。

「確か、俺と静那、そいから女の子が二人相部屋みたいだな」
「女の子と相部屋とかアリなのかよ！？」

いや……まだ俺は中一なんだ……そう考えれば有りな気もすｒ……いやしねぇよ！

「まずいだろ！」
「いや……学園都市一人目の女の子を手にするチャンス」
「コロスヨオマエ」
「なんで片言だよ！？　怖ぇよ！」
「イケメンは死ね！」
「お前に言われたくねぇよ！」
「……へ？」
「自覚ナシか……コイツ、性質の悪い鈍感になりそうだな」
「何言ってんだ帝督」
「いや……なんでもない。ほら、この部屋だ」

３０３号室と書かれた中々豪奢な扉に、帝督がカードキーを照合する。カチャン、と音がして、一人でに扉が開いた。

「誰も居ねぇな」
「あぁ。ま、荷物だけ置いていくか」

@

そのホテルからまたもバスに揺られること３０分。こじんまりとした研究所に、俺たちは居た。

「ここが、身体検査会場なのか……」
「常識を覆す……なぁ静那？」
「どうした？」

研究員の案内で、コツコツと靴音が響く廊下を歩く俺たち。

「常識を覆す能力、お前はどんなものを考えた？」
「……帝督は？」
「俺はもう決めた」
「マジか！」

俺の声が音響のように響き、帝督は指を口に当てる。

「……俺が考えたのは、この世のものじゃない物体を作り出す能力だ」
「この世のものじゃない？」
「そう。この世には存在しないもの」
「……創造能力か？」
「ちょっと違うんだけど……よっしゃ！　静那にも理解できないってことは、俺の現実は確立されたようなもんだ！」

目の前でガッツポーズを取る帝督。このメルヘン野郎、と言いたかったが、意味不明なのでやめておく。
一頻り感動し終えたのか、帝督は俺のほうを向いた。

「静那は決めたのか？」
「……帝督のは反則技だな。俺のも同じくらい反則だけど」
「聞きてぇ！　教えろよ！」
「俺のは……簡単に言えば、この世の法則を捻じ曲げる能力だ」

「……？」
「例えば、俺にかかる重力を変化させて空を飛ぶとか……相手の能力を逆算して改造したりとか」
「相手の能力を改造？」
「そう。例えばさっきの帝督の能力なら、その作り出した物体が“この世にあるもの”に変えちまったりな。そうすれば、それに対抗する物体を俺は生み出せる」
「は……反則……」
「だろ？　でもどうせ言ったままの能力が手に入るわけじゃないからな。そのくらい大きく考えておいたほうがいいさ」

そう言った俺の目の前にはもう、電極がいくつもついたベッドがあった。

００４　ＶＳ帝督（前書き）

っつっても練習試合（笑）

００４　ＶＳ帝督

目が覚めると、暗闇だった。

「……ここは？」

『ここは……学園都市の中心だよ。藍藤静那くん』

「！？」

声のしたほうを見ると、円柱状のビーカーのようなものに入った、逆立ちの変態が居た。

『変態などと言われたのは初めてだが……』

「読心術ですか？」

声に出してはいないはず……。

『違う。君は今、身体検査の会場で眠っているはずだ。意識だけを、ここに持ってきた』

意識、だけを？

『そう。私はアレイスター・クロウリー。学園都市の統括理事長をしている』

「統括理事長！？」

逆立ちの変態が統括理事長だなんて……。

『だから変態ではあるまいに……』

「それで……なんで俺はここに？」

『あぁ、そうだった。君の能力についての話だ』
「……？」
『君の能力は“法則解析（アナリーロウ）”……全く、私もこんな反則が出てくるとは思っていなかったよ』
法則解析（アナリーロウ）？
『君の能力は、この世の法則を捻じ曲げる能力だ。最も、人の身で出来ることには限界があるのだが。とにかく、一つだけ言って置く。この学園都市で、君の存在は無敵に近い』
「……！」
俺の現実が認められたってことか！？
『まぁ端的に言えばそういうことだ。能力の発現レベルはＬＥＶＥＬ５。つまり、現時点での最強だ。さて……本題に移ろう』
「なんで俺が呼ばれたか？」
『そうだ。君はこの学園都市がなんのために存在しているか知っているかい？』
確か……ＬＥＶＥＬ６だっけ。
『そう。神ならぬ身にて天上の意思に辿りつくもの……ＬＥＶＥＬ６を誕生させることだ。はっきり言えば、現時点では君が一番近い』
「！？」
『だが……なのだよ。君の力は先ほども言ったようにほぼ無敵。そんな人間がＬＥＶＥＬ６にまで上り詰めてしまったら、もう人間界では誰も対処できなくなる。君の周りに誰も居なくなって孤独になるのは嫌だろう？』
「……」

『結論を言おう。君はＬＥＶＥＬ５だが、ＬＥＶＥＬ６にはしないつもりだ。メインプランは今まで通り、一方通行……第一位にやってもらう』
「俺はどうすれば？」
『序列、は知っているね？』
「ＬＥＶＥＬ５にだけある、アレですよね？」
『そう。君の序列は第零位。これは公開するつもりだ。なんで零か、までは絶対に他言無用だ。……まぁ、同じＬＥＶＥＬ５になら言ってもいいぞ。君の親友になら、ね』
「帝督はＬＥＶＥＬ５なんですか！？」
『あぁ。おそらく序列は第二位。彼にはスペアプラン……ＬＥＶＥＬ６シフトの二番手を担ってもらうからね』

そっか……帝督はＬＥＶＥＬ５か！

『そこで、君を呼び出したもう一つの理由だ』
「……？」
『ＬＥＶＥＬ６には、遠からず誰かが辿りつく。その時に、もしその人間が暴走するようなら。君が歯止めになって欲しい』
「……分かりました」
『そうか。なら話は終わりだ。君には私への直接交渉権を与えておく。ケータイに私の番号が入っているだろうから後で見たまえ。と言っても、私からは念話だがね』

その直後、俺は再度意識を失った……。

@

「……きろ！」

あん？

「おきろ静那！」

目を開けると、天井と俺の間に、とても良い笑顔の帝督が居た。

「どうしたんだよ、随分と嬉しそうだけど」

「俺もお前も、ＬＥＶＥＬ５だ！」

「……マジか」

どうやら、今までの会話は夢ではなかったらしい。

ということは、目の前に居るのは学園都市の第二位……未元物質（ダークマター）の垣根帝督だ。

「俺の現実は、本当の現実になったんだよ！　これがハイテンションでなくて居られるか！」

「はは、そうだな！」

いつの間にか俺も笑顔になっている。

おきれば、そこは会場ではなくて先ほどのホテルだった。

「……いつの間に戻ってきたんだ？」

「お前がずっと眠ってるから、そのまましょっ引いてきた」

馬路ですか。もといマジですか。
脳内でくだらないことを考えていると、隣からガタン、と音が聞こえた。

「……？」

ベッドから起き上がり、横を見ると。一人の女の子がこちらを睨んでいた。
ていうか胸でか！？　なんすか！？　中一だろ！？
黒髪を背に流したその子は、俺が見ると、顔を赤くして目を背ける。……ええと。

「忘れたのか静那。女の子と相部屋」
「あぁ……あったなそんな話も」

すっかり忘れてたぜ。ていうか、この子のほかにもう一人居るはずじゃ……居た。
ベッドから目から上だけ出してこちらを見ている。……なんですかこのカオス。

「じゃあ紹介するな。黒髪美人のあの子が、吹寄制理さん」

俺を睨んでいた子が、目を背けたまま軽く頭を下げる。

「んで、こっちの金髪少女が、重音里奈（かさねりな）さん」

目だけ覗かせている女の子が、こちらに視線を合わせて挨拶。小声でこんにちはと聞こえた。

「んでこっちね。俺の幼馴染の、藍藤静那だ」

「よろしく〜」

俺が軽く手を振ると、吹寄さん……だったか。彼女が口を開いた。

「貴様が……第零位と発表された法則解析（アナリーロウ）なの？」

二人称貴様かよオイ……。

「もう発表されたのか……早いな学園都市」

「あの、さ……」

「あん？」

恥ずかしそうに手を擦り合わせながら、またも目を背ける吹寄さん。

「私、ＬＥＶＥＬ０なのよ。だから、能力を見て見たいな……って思ったんだけど、ダメ、か？」

「能力を？」

「ちょうどいい！」

いきなり声をあげた帝督……あん？　どこだ？　……居た。なに重音さん口説いてんだテメェ。

「俺と一回勝負しろ！」

……マジかコイツ。

@

その数分後。俺たちは、ホテルの外にある公園にいた。もう夜遅く、誰もいないようだ。
相対する俺と帝督のほかには、少し離れて吹寄さんと重音さんも居る。

「いくぜ……静那！」
「望むところだ！」

正直一回も使ったことがない能力。どの程度扱えるかは分からないけれど。
俺はただ単に帝督に突っ込んだ。

「直接攻撃かよ……能力使えよ」

そう呟いた帝督。突如その背中に六枚の翼が勢いよく生える。
俺のグーパンチをかわすように、後方へと羽ばたいた。

「羽かよ」
「羽とか言うなし！」

怒鳴りつつ、帝督はちょうど二階ほどの高さまで飛び上がる。

「……何よアレ」
「すごい……」

吹寄さんと重音さんの呟きが聞こえる。ていうか、帝督派手だなぁ。

「んじゃ、俺も飛ぶか」

俺にかかる重力を急激に下げる。そしてそのまま、俺に対する風の抵抗力を極限に下げる。

「なに！？」

「いくぜ」

そのまま突進。風の抵抗は全く受けない。一瞬にして帝督の前へと。そのままグーパンチを繰り出す。

「ッツ！」

帝督はその翼で俺のパンチを防ぐと、もう一段階上昇した。

「俺の能力言ってなかったよな。俺の能力は“未元物質（ダークマター）”この世に存在しない物質を生み出し、操る能力だ！」

「……本当に厄介な能力だぜ」

突如、翼から数多の光線が射出された。

「なに！？」

「街灯から出ている明かりをレーザーにしただけだ」

「んなこと出来るわけ……」

「ないよな？　だが静那。“俺の未元物質に、その常識は通用しねぇ”」

「！？　カッコイイセリフ吐きやがって」

さてどうするか。コイツの非常識な攻撃をかいくぐるには。……！？

「苦しいだろ」

「な…にを……？」

「お前の周りに、大量の酸素と結合する物質をばら撒いた。呼吸困難になるのは当然だ」

殺す気か！？

この野郎、やってくれんじゃねぇか。

「うぉおおおおおおお！」

「！？」

俺は力を放出する。それは、公園全体に広がった。

「何をした？」

帝督の体には、なんの問題もない。当然だろうな。

「さぁ、何をしたでしょう」

「呼吸が戻ってる！？」

俺を呼吸困難にした罪、償いやがれ！

そのまま、空中の帝督に突っ込む。そのまま、グーパンチを繰り出した。

「……！　光線が発動しない！？」

「はは！　当然だ！　今、この公園には既存の物質しかねぇよ！」

「！　朝に言ってたことをやりやがったのか！」
「お前の生み出した物質全て、まとめて窒素で燃やしたんだよ！」
「窒素で！？　そんなことできるわけが！」
“法則（ルール）は俺が作り出す”！」

一発帝督の腹に拳打を叩き込み、勝負は決した。

@

戦闘後……真夜中の３０３号室。

「まさか……あんなにあっさり負けるとはな」
「ていうか殺す気かお前。呼吸困難とか」
「そういうな」

俺たちが談笑していると、吹寄さんも入ってきた。

「貴様たち……戦闘がハイレベルすぎて何やってるのかわからないじゃない！」
「ＬＥＶＥＬ５だけに」

横からぼそっと、重音さんが呟く。上手いこと言うなオイ。

「そういえばさ、静那」

「あん？」
「中学、どこにするよ」
「あぁ～……適当でいいよ。寮が綺麗なら」
「俺も同意見だから悩んでるんだけどな？」

帝督が苦笑する。すると吹寄さんが言った。

「私が行こうとしてるところ、結構綺麗な校舎よ？」

パンフレットを取り出して吹寄さんが開いたページを、帝督と俺で覗き込む。
重音さんも同じように、吹寄さんの後ろから見ているみたいだ。

「柵川中学……？　帝督、聞いたことあるか？」
「んにゃ、無い」

吹寄さんがパラパラとページをめくっていく。なるほど確かに校舎は綺麗だ。近代的ではない、シンプルな校舎だが。

「寮はどうなってるの？　吹寄さん」
「……制理でいいわよ？」
「吹寄さん？」
「制理」
「吹ｙ「制理」……はい」

目が……目が怖いです。

「それに、貴様たちと行けばいろいろ能力にも変化があるかも知れないし」
「そっか吹ｙ……制理はもうこの学校で決めるんだ？」

「そうね。あまり高能力者がいないところが良かったし」
「……高能力者が居ない？」
その言葉に反応したのは、帝督。
「そうよ。大体高能力者っていうのは名門の中学やら高校に行くからね……ここは、普通の学校」
「エリート意識の人が少ないんです」
重音さんもアドバイスしてくれた。なるほど、俺もそういうウザイのは居ないほうが嬉しい。
帝督はまだ不安が残るようで、制理に問いかける。
「でも、それって俺たちが行くのはまずくないか？」
「大丈夫よ。柵川はむしろ高能力者を募集してるんだし。実績がないからみんな行かないけど」
「なるほどな。……静那はここでいいか？」
「小六の頃にした約束が果たせるならどこでも」
俺が言うと、帝督も笑う。
「当然。どこでも果たせるさ」
「ならここでいいよ……重音さんは？」
「あたしもここでいいです」
「なら決定だな。いざ、柵川中学へ！」
いつの間にか四人一緒に行ける学校を探していたが、まぁいいだろ。
「ところで、静那。約束って何よ？」

「あぁ……俺と帝督で、学園都市最強の二人組になる！　てヤツだ」
「そうそう……って静那」
「あん？」
「もう……序列的には最強じゃね？」
「あ」

００５　最愛

翌日。四人で柵川中学に入学届を出すと、校長は泣いて喜んでいた。ＬＥＶＥＬ５が二人も！　とか言ってたな。うん、悪い気はしない。

その日のうちに寮が与えられ、そこで一旦制理、重音さんとは別れた。

寮部屋は、帝督と隣同士。最上階ということで見晴らしもよく、三年間過ごすのになんら問題はなさそうだ。

俺が寮部屋に届いた物資を片付けていると、チャイムの音がした。

「……帝督か」

「よう、買い物行かねぇ？」

適当な身なりで、繁華街へと出かける。買う物を聞くと、主に食材だった。お前、意外と自炊派か。

ちらちらと、通りすがりの女の子たちが帝督を見ていく。

「「ッッ、これだからイケメンは……あ？」」

帝督に向かって文句を言うと、同じ言葉が帰ってきた。なんすか、嫌味っすか？

ぶっちゃけ身長は同じくらいだけれど、コイツのツラはどう考えたってモデルかなんかだ。元の世界でいうなればジャニ〇ズ。

「なんでハモんだよテメェ」

「うるせぇよ帝督このイケメン野郎が」
「テメ……ハァ。ほら、着いたぞ」

目の前にはスーパー。学園都市といえど、スーパーは一緒か。
……あん？

「オイガキ！　何で黙ってんだよ！」
「っく！」

……オイオイ。何事だよ。スーパーの脇で女の子が数人に囲まれてやがる。路地裏ならまだ可愛げがあるが、白昼堂々天下の往来で何してんだよ。
って、いつの間にか帝督スーパー入っちゃってるし。はぁ、俺が助けるか。

「……何事だテメェら。白昼堂々と」
「あぁ！？　部外者はすっこんでろ！」
「いやぁ、部外者どうこうじゃないだろ……大丈夫か？」
「このくらい……超平気です」
「ふざけてんじゃねぇぞクソガキ！」

俺が手を差し伸べた少女に、殴りかかろうとする輩が一人。

「ちょっと黙ってろハゲ」
「ぐわぁ！」

目の前のスキンヘッドの周りだけ、重力を五倍に設定する。押しつぶされた男は、懸命に立ち上がろうとするが無意味。

「何しやがった！？」

「殺すぞコルァ！」

喚く男ども。黙れっての。

「殺す？　殺せるモンなら殺してみ？」

帝督との戦いのあと、かなり自分の能力を研究した。考えれば考えるほど、俺の能力はチートなんだよ。

……喰らえ。

俺が力を放出した途端、連中の動きが目に見えて遅くなる。ボブカットの少女も、目を丸くしてこちらを見た。

「ハエの目ってしってるか？」

「な…に……？」

「あいつら、人間よりもかなり速い速度で動くし、人間が新聞紙やらなにやらではたこうとしてもかわすだろ？　あれってさ、アイツらの目に要因があるらしくてな。あの目、人間の動きなんざスローモーションに感じてるらしいぜ？」

「な……にを……？」

「だから、今やってんのはその応用。“ハエの目が感じてる速度に、この空間を設定した”」

「……！」

少女はもはや唖然としている。重力を操ったあとに、時空を操るのだから当然か。

「こんなこと、できるんですか……？」

「普通は出来ない。けど、“法則（ルール）は俺が作り出す”」

「……！」

「さぁて、俺はフェミニストなもんでな（嘘）、女の子が傷つくの

を黙ってみてるわけにゃいかねぇんだ」
「今、かっこ嘘って超聞こえましたけど！？」
「……っつーわけで、俺の法則（ルール）では死体決定だゴミクズ共」
超スルーですか……という少女の声を無視して、俺はそのまま目の前の空間の重力を１００倍に設定した。

@

「……さて、少し話をしようか」

場所を変えて路地裏。そこにあったドラム缶に少女を座らせ、俺は目の前にしゃがみ込んだ。
改めて見ると、まともな服装じゃない。工場の作業服みたいな格好だが、ところどころ肌が露出しているほどボロが酷い。一体どんな仕打ちを受けてきたのかと、今にも詰問したいくらいだ。
「とりあえず、名前は？　俺は藍藤静那ってんだ」
「絹旗……絹旗最愛です」
「じゃあ、最愛。何があったんだ？　服もボロボロだし、傷も見える。とても、まともとは思えないんだけど」
俺が聞くと、最愛は俯いて呟いた。

「……暗部を知らない表の人間が、超分かるわけないです」
「……それでもだ」
「表の人間を引き込むわけにはいかないです」
「あのな……とりあえず話してみろ」
「だから！　表の人間は超踏み込んじゃいけない問題なんです！」

キッと俺を睨みながら声を上げる最愛。だけど、目には涙が浮かんでいた。

「なぁ最愛。表とか裏ってさ、どこで区切られてんだ？」
「……」
「俺には最愛が言う裏とか表は分からない。でも、それって分からなくてもいいんじゃないか？」
「……？」
「むしろ、分からないほうが良いと思う。自分が裏の人間だと思うから、表の人間を遠ざける。逆もまたあるかもしれない。でもさ、そんなの、あっちゃいけないだろ？」

諭すように、最愛の肩に手を置いた。彼女はボロ布のような右袖で目を押さえて嗚咽していて、とても話せる状況じゃ無さそうだ。だから、俺が一方的に話す。

「大丈夫。最愛は裏とか表とか関係なく、良い子だと思うよ。今だってきっと、俺を巻き込まないために話さなかっただけだろうし。それは、最愛が否定しても気にしない」

そっと、彼女を抱きしめる。俺の胸に、ちょうど顔が来るように。泣くなら、人に縋ってなければいい。

一頻り泣いた最愛は、少し落ち着きを取り戻したあと、ことの次

第を話してくれた。暗部の組織で下働きをさせられ、チャイルドエラーなのをいいことに実験すらもされ……クソ野郎。

「ちょっと待ってろ最愛」
「ふぇ？」

俺はケータイを取り出し、二つの電話をすることにした。

「……お。もしもし、帝督か？」
『あん？　テメェどこに行ったかと思えば』
「悪いんだけどさ、買い物終えたら荷物を置いて、スーパーの前きてくんねぇか？」
『はぁ！？　なんでだよ』
「簡単だよ。……俺らの伝説の始まり、冒頭部分を綴るだけさ」
『……フ。すぐに行く。待ってろ！』

よし。とりあえず一人。

「今の相手は誰なんですか？」
「俺の親友さ」
「へぇ……超羨ましいです……」
「さて、もう一つ」

「……繋がったか」
『なんのようだ……いや、分かっているさ。許可しよう。あの研究所はもう必要ないからな』
「どうやって知ったかは聞かないっスけど……もう一つお願いがあるんスよ」
『……？』
「戸籍。俺に妹を追加」

『なるほど。君は優しい人間のようだ』
「自己満足さ」

よし、これでオッケーだ。

「今の相手は誰なんですか？」
「統括理事長さ」
「へぇ……超羨ましい……て、え！？　統括理事長！？」
「あぁ。俺の恩人……かな？　変態だけど」
「変態！？　超統括理事長のイメージが！」

俺の脳内に抗議の念話が届いた気がするが、気にしない。

「静那さん……統括理事長と超パイプがあったり、超トンでもない能力を使ったり……超何者なのか問い詰めます！」
「……しがない中学一年生だよ？」
「超違います……」

茶番は置いておいて……とにかく。最愛を痛めつけた施設をぶっ潰す。

００６　――逆算、終わるぞ

最愛の案内で辿りついたのは一つの研究所。
ここで最愛は実験動物にされていたらしい……。

「許せるわけ、ねぇな」
「あぁ。きてくれて助かったよ、帝督」

ことの次第は説明した。あとは、俺と帝督でこの研究所に突っ込む。

「私も超行きたいんですけど……」
「ダメだ。お前の能力は知られているし、当然それに対する対策は打ってあるはずだ。なら、わざわざ最愛を危険に晒すことはない」

俺が首を振ると、最愛は黙って頷いた。
しおらしいのが、少し愛らしい。

「終わったら、一緒に映画見に行こうか？」
「映画……ですか？」
「俺も詳しくは知らないんだけど、最近はＢ級映画ってのが流行らしい。な？　行こうぜ」

微笑んで最愛を見やる。彼女は頬を赤らめて、頷いた。

「超約束しましたからね？」
「あぁ。絶対だ……帝督、行くぞ！」
「へいへい……俺もさっさと里奈ちゃん攻略するか」

なんだかテンションの低い帝督だったけど、なんかあったのか？
最愛を研究所の前に置いて、俺たちは走り出した。

@

「侵入者を発見しました」
「何？　……見ない顔だな。まぁいい。実験動物は放っておけ。キャパシティダウンを設置しろ！」
「「了解！」」
「さて、我々は避難だ……いや、頭に乗っている小僧を殺すのも悪くない、か」

「意外に、誰もいねぇんだな？」
「みたいだけど……油断はナシで行こう」
「もちろん」

とにかくすることは二つ。ここのシステムのダウンと、主犯研究者の排除。

どこに居るかまでは分からないが、とりあえず最愛から地図は貰ってんだ。地下三階のデカい施設が研究所に違いねぇ。

「静那」
「あん？」

走りつつ、横から帝督の声。

「こっから、俺たちの伝説が始まるんだよな？」
「あぁ。名実ともに最強の二人組……その幕開けだ」
「……ガラにもないほどテンション上がってきちまった……最愛ちゃんのためにも、俺たちのためにも、この研究所はぶっ潰す！」
「当然！」

地下二階から、降りる階段を見つけた俺たち。実際何度か襲撃があったみたいだが、帝督の未元物質で全て防いでいる。ぶっちゃけ、気付かないうちに帝督が片付けていた。

「さて、おそらくこの階段の下が研究施設だ」
「あぁ……所謂ラスボスだな」
「行くぞ、帝督！」
「もちろんだ静那！」

俺の能力で階段を破壊し、そのまま飛び降りる。
大きな扉があったが、帝督の翼で粉砕した。

「おやおや、画面で見るよりもガキじゃないか」
「テメェが主犯か……」

白衣を着た、白髪のジジイがそこに居た。見るからに小バカにし

たような視線。俺たちを前にして、余裕だな。能力は見てると思うんだが。

「お前らガキどもがどんな能力を使うかなんて関係のないことだ……ワシの研究の邪魔はさせん！」

「最愛を実験動物にしておいて何をふざけたこと抜かしてやがる！！」

「最愛……？　検体番号で言ってもらわんとどれのことやらわからぬな」

「このや「テンメェ！！！」帝督！」

帝督が低空飛行で突進する。が、ジジイはニヤリと笑って、ボタンを押した。

キィィィィィィィィィィン

「ぐわ！？」

「……帝督！」

突進途中で帝督の翼が消滅し、帝督は頭を抑えて屈みこんだ。……俺も頭が割れそうだ。

それを見たジジイはあざ笑うように言う。

「こいつは能力者に反応する装置だ……お前らがどんな能力者だろうと関係ない……その意味が分かるかね？」

「……」

俺と帝督が黙っていると、自分に酔ったジジイはさらに続ける。

「これはまだ未完成だ。強い能力者にしかあまり反応せんしの。だ

が、好都合だ。お前らはかなり高位の能力者だったみたいだしな……ふぇっふぇっふぇ！　ざまあないの！」

俺と帝督が何事も無かったようにジジイの話を聞いてても、まだ続ける。

「ワシはまだまだこの研究を続け、ゆくゆくは能力者どもを従えて学園都市を掌握する！　まさに、まさにこれは最高の発明！　ワシは……ワシは！　最高の科学者となるのだ！」

帝督、欠伸すんなよ。

「ワシは……ってむぅ！？　なぜ！　なぜキャパシティダウンが効いてない！」

あ、やっと気付いた。ちなみに、キィィィィンって音はまだ鳴ってる。

「簡単だジジイ。この空間上での音波を少しずらしただけだ」

「なにぃ！？」

俺が言うと、帝督も続ける。

「ついでに、今から俺たち反撃するから。ちょうどいい、この音波を、テメェみてぇなジジイにダメージを与える音波に変えてやるよ」

「そんなことができるわけが……」

「普通はな。だが、俺の未元物質にその常識は通用しねぇ」

「なんだと……未元物質……？」

また俺にバトンタッチ、帝督に続けて俺が口を開く。

「ついでにこの空間から外部に放出される電波の概念断ち切るから、スイッチ切ろうとしても無駄ね？」
「有り得ない！　理論が合わないぞ！　空間から放射の“電波”だけを断ち切るなんぞ……」
「できないと思うか？　残念だが、法則（ルール）は俺が作り出す」
「法則……まさかお前ら、“法則解析（アナリーロウ）”と“未元物質（ダークマター）”！？」

ジジイがほざいているが、俺たちは演算の真っ最中。ジジイ、怯えて失禁しやがった。きったねぇなオイ。

「は、はははははは！　お前らそんなことしたら統括理事会から睨まれるぞ！　いいのか！？　ワシのバックは大きいんだ！　学園都市全体を敵に回すことになるぞ！」

「ごちゃごちゃうるせぇなぁ……」

帝督が頭を掻いて言う。さて……準備はいいか？　帝督。

「「――――逆算、終わるぞ」」

@

「おかえりなさい」

戻ってきた俺たちに、微笑んで最愛はそう言った。彼女なりに言葉を選んでいたのかもしれない、自然に出たものかも知れない。でも、俺にとって今一番嬉しい言葉であったことは間違いない。

「あぁ、ただいま」

「良かったな、最愛ちゃん。もうここに戻る必要はねぇよ」

帝督が最愛に笑いかける。そんな帝督に最愛はぺこりと……深く頭を下げた。

「とにかく、協力ありがとうな、帝督」

「何言ってんだ？　俺たちの活躍だろう？　礼を言う立場も、言われる立場もねぇ」

「はは、そっか」

笑って二人で、拳を突き合わせた。

そういえば、悪ふざけしたあとはいつもこうしていたな……大成功って。

「そんじゃ、俺は一足先に寮に戻るわ。静那は最愛ちゃんにしっかり生活用品かってやれよ～」

「あ、おい！　……飛んで帰るとか。人様に見られたらお仕舞いだろメルヘン野郎……」

俺の呟きが聞こえたのか、最愛は横でクスクスと笑っていた。

と、さて。

「帝督に言われたとおり、行くか」

最愛のほうに向き直ると、なにやら彼女は腿に両手を挟んで俺から目を逸らしていた。

……？

「どうした？」

「さっき……統括理事会の人から超連絡があって……それで……」

統括理事会？　……あぁ。アレイスターさんに頼んだアレか。

「ふ、ふつつか者ですが、よ、よろしくお願いします……」

「それ、お嫁に行く時のセリフじゃね？」

「お、およ、お嫁！？　……うぅ、超恥ずかしいです……」

まぁ、とりあえず戸籍上は妹になったわけだ。

「これからよろしくな」

「は、はい！」

最愛の可愛らしい微笑みに、ついつい俺も感化されて笑みを返した。

「とりあえず、買い物行くか」

ボロボロの自分の服装に気付いたのか、最愛ははずかしそうに頷いた。

「は、はい……」

００７　ある日の夜

最愛との買い物を終えた俺は、寮の部屋に戻ってきていた。

「さて……とりま晩飯にすっか」

「あの……」

「あん？」

部屋に入って伸びをしている俺の後ろから声がかかる。振り返ると、最愛がなにやらキラキラした目でこちらを見ていた。

ちなみに服装はすでに変わり、可愛らしいフリル付きのミニスカートとブラウスという身軽なものになっている。

あん？　作業服？　んなもん捨てたわとっくに。

「……どした？」

「私、超料理したいです！」

「……できるなら文句は全くない」

「はい！」

このパターン、ラノベやマンガだとマジでぶっ倒れるようなもの作るやつが出てくるからな。……バカ〇スの姫路さんとか。

喜び勇んでキッチンに飛び込んでいく最愛。冷蔵庫を覗き込んで、何にするか決めているのだろう。

「お、俺も手伝おうか？」

「超結構です！」

「……あ、そう」

嫌な予感しかしないのは、気のせいだと思いたい。

手持ち無沙汰になった俺は、最愛に通わせる小学校を選ぶことにした。
帰り際に聞いた彼女の能力はＬＥＶＥＬ４の窒素装甲（オフェンスアーマー）……どうやらその能力を研究されていたらしい。
でもまぁ、ぶっちゃけＬＥＶＥＬ４もあるのであれば、どの学校でも問題ないだろう……ということで、俺の通う柵川中学近辺に絞って探す。……そういえば。

「最愛～？」
「はい！　超頑張ってます！」

……いや、聞いてないよ。ここまで来たら信用するって。

「じゃなくてさ、今何年生か分かる～？」
「はい！　浪人生です！」

……いや、研究所にずっと居たらそうかもだけどさ……。

「最愛何歳～？」
「お、乙女の年齢を「あ～もう面倒臭い！　小学校に転入させるから年齢教えて！」……あ……そういうことでしたか」

やっと分かってくれたようだ。返答を待つ。

「でも……私なんかまで学校行き始めたら超お金掛かりますよ……？」

フライパンを木へらで叩くような音とともに、最愛の寂しそうな声がする。

「あぁ、平気平気。アレイスターさんの計らいで俺、月々５０００万貰ってるから」
「桁が超違う！？」

なんか、俺の能力に対する研究のためと、ＬＥＶＥＬ６にしない慰謝料的なものらしい。帝督に言ったら、俺の倍以上じゃねぇか！
って怒ってた。いや……この半分でもかなり充分なんだけどね。

「だから平気～」
「そういうことでしたら……今五年生です」
「ん、了解」

五年生か。まぁ、六年生よりは転校も不自然じゃないな。あ、でも前の世界で俺のクラス、六年の冬から転校してきたヤツ居たっけ。
さて……ここと、ここのどっちかで最愛に選ばせよう。

「超出来ましたぁ！」
「……覚悟を決めるか」
「ちょっそれはいくらなんでも超酷い発言だと思います！」

テーブルの上に様々な料理が並ぶ。っていうか……。

「なんか……滅茶苦茶美味そうなんスけど先輩……」
「ふふん！　思い知ったですか！」

全体的に中華風なのは何でか知らないが、すごい。チンジャオロースーにショーロンポー、フカヒレスープに海鮮チャーハン。最愛サン、度重なるご無礼、お許しください。
俺の正面にちょこんと最愛が座り、二人で食事を開始する。

「うまぁ！　何コレうまぁ！」
「研究所での唯一の暇つぶしが料理本でしたからね。超舐めないでください！」
「いや……マジでうまいっす最愛サン」
「ふふ……ありがと」
「！」

満面の笑みの最愛。とてつもなく可愛いんですけど。今日からこの子が妹なんだよな……。

「あ……あの……」
「ん？」

感慨に浸りながらチャーハンをパクパクしていた俺に、最愛が不安げな視線を向けてくる。

「なんて呼べば……いいですか？」
「なんでもいいよ。最愛が好きな呼び方で。っつーか兄妹なんだ。敬語なんざ使わなくていいよ」
「あ、いえそれは私のデフォなんで……」

そう言って照れてから、一息置いて最愛は、俺と目を合わせて笑顔でこう言った。

「お兄ちゃん、でいいですか？」
「あぁ、それでいい」

@

「最愛〜、風呂沸いたから先入って〜」
「え……いやお兄ちゃん超先でいいですけど」
「いいから入れ」
「えぇ〜……」

とりあえず洗面所に最愛を押し込んだ俺は、ケータイにメールが来ているのに気がついた。

『ｆｒｏｍ　てーとく
ｔｅｘｔ　明日入学式だとよ。新入生の集合は９：２０だっつーから、９：００にお前んとこのチャイム押すわ』

もう明日っから入学式なのか。楽しみだな、学園都市の学校。

『Ｔｏ　てーとく
ｔｅｘｔ　ほいほい了解。そういやさ、最愛の料理メチャメチャ美味いんだわ。３０分前にウチ来てさ、三人で飯にしねぇ？』

送信っと……。すると、間髪いれずにメールが来る。こいつの返信速度は異常だ。

『ｆｒｏｍ　てーとく
ｔｅｘｔ　マジで！？　行く行く！　んじゃ、８：３０に行くな……

……あと。お前俺のアドレス帳名の“てーとく”マジやめろ。この前お前のケータイ見た女の子が俺のキャラ誤解してたから』

知るか。

「超出ましたよ～」

湯上りでほんのり上気した最愛がバスタオルを首にかけて出てくる。

「あぁ、じゃあ俺入ってくるから、どっちの学校行きたいか決めておいて」

「あ、は～い」

パンフレットを受け取った最愛を部屋において、俺は風呂に向かった。

@

最愛は静那が風呂に入ったのを確認すると、パンフレットを眺めて一人憧憬の念を噛み締めていた。

なんと言っても初めて“学校”に通うのだ。正直当然といえば当

然かもしれない。
右の学校は常盤小学校。名門常盤台中学の系列で、ＬＥＶＥＬ２以上の能力者でないと受け付けない。ちなみに女子校である。
左の学校は河瀬小学校。能力などの縛りはないが、こちらも優秀な能力者を輩出し続ける名門。ちなみに共学。

「……どっちにしようかな。超迷いますね」

いずれにしても学校に行けるので、最愛にしてみれば静那が“こっち”と決めれば何も言わずに従うのだが。

「お兄ちゃんだったらどっちに行きますかね……あ、常盤は女子校か。……む？　お兄ちゃん？」

何かが引っ掛かった最愛。実際この時最愛自身は気付いていないが、完全に静那に惹かれていた。そんなわけで、引っ掛かるものを懸命に探していた最愛だったが……。

自分→小五
お兄ちゃん→中一
つまり……
自分→中一
お兄ちゃん→中三
結論。一年間一緒に登校が可能！
引っ掛かりは完全に消えた。

「うん、中高一貫は友達とのふれあいも超少なくなりますしダメですね。そうです、絶対に小学校は単体じゃないとダメなんです。人とのふれあい超大事」

無理やり結論付けて、最愛は河瀬小学校に通うことを決める最愛。

と、そこで静那が風呂から出てきた。

@

最愛がかなり勢いよく「河瀬小学校がいいです！」と言ってきたので呑まれて頷いてしまったが、ふむ。

やっぱり共学ってことは、最愛も男子が気になる年頃なのかね？

『ダメだコイツは……』

「アレイスターさん！？」

……気のせいか。

００７　ある日の夜（後書き）

この話書いてて思った。てーとくってタグ入れよ（笑）

００８　柵川入学

現在、最愛はキッチンで鼻歌を歌いつつ朝食の調理の真っ最中。
俺は二人分の布団を片付け、制服に腕を通す。学ランっつーオーソドックスな制服は、黒髪の俺には結構合うと思うしな。
と、そんな時にインターホンが鳴った。

てーとくだよ！　早く開けて！　てーとくだよ！

「はいはい今行きます」

がちゃ。目の前にはプルプル震えている帝督。

「テンメェ！　どんなインターホンにしてやがる！　昨日〝てーとく〟やめろっつったよなぁ！？　早く開けて！　じゃねぇよこの野郎！！」

ドアを開けた瞬間、暴言の嵐。うん、サプライズ効果はばっちりだ。
帝督を無視して外に出る俺。帝督は中に入る様子もなく、訝しげに俺の行動を見守る。

さぁて！　〝ピンポン連打〟の時間だぜぇ！

てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくだよ！てーとくてーとくて

ーとくてーとくてーとくてーとくてーとくてーとくてーとくてーと
くてーとくてててててててて！！！

「何してんじゃボケカス野郎があぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「ピンポン連打」
「見りゃ分かる！　お前は常識ってもんを知らねぇのか！？」
「俺の未元物質に、その常識は通用しねぇ」
「それ俺のキメ台詞ぅうううううううううううう！！！」

一通り帝督を弄った俺は、部屋に入る。後ろから、いろいろと打ちひしがれた帝督が黒いオーラを発しつつ着いてくるが気にしない。

「最愛〜、帝督連れてきた〜」
「は〜い……あれ？　この人超誰ですか？」
「あ〜、色々あってげっそりしてるけど、昨日俺と一緒に居たイケメンで間違いないと思うよ」
「そうなんですか……人って超変わるもんですね」
「テメェの……せいだ……」

朝食できました、というので三人でテーブルに着く。復活した帝督が感動していた。

「何だよコレ！　美味そうだな！」
「昨日のといい今日といい、最愛はもうこっちの才能があるよな」
「へへ……超嬉しいです。頑張った甲斐が超ありました」
恥ずかしそうに頭を掻く最愛。今日の朝食は完全にイングリッシュ・ブレックファスト。最愛、もしかして和洋折衷なんでもござれ？
量も中々多かったけれど、正直まだいくらでも食べられる。その

くらい美味い朝食を食った俺と帝督は、そのまま玄関へと向かった。
「いってらっしゃい」
「なんかこういうの見てると、新婚さんみたいだな」
帝督が茶化すと、最愛は一瞬で真っ赤になる。おいおいいじめるなよ……。
「そんな……でもお兄ちゃんと……ふふ……でもダメだよそんな……エへへへへ……」
「お～い、最愛？」
「ふぇ！？　あ、超なんでもないです！　ささ、いってらっしゃい！」
「お、おう」
時刻はちょうど９：００ごろ。俺たちは寮をあとにした。

@

「にしても帝督、学ランぴっちり着るのは似合わねぇな」
「んな！？　そうか……？」
「ボタン二、三個外してたほうがお前らしいよ。まぁ校則違反だろうけど」

帝督が学ランを第一まで締めているのはなんとなく微妙だと思うのは俺だけだろうか。

「じゃあまぁ、学校着くまでは外しとくか」

「あ、俺もそうしよ」

二人で第二までボタンを外す。うん、帝督はそっちのが似合う。シャツ出しはダサいからNG。

あれこれ他愛もない話をしながら、繁華街へ入る。通常この時刻は学校に通っていなければならない時刻なのだが……まぁ端的に言えば不良も居るわけだ。男女関係なく。

たむろしている女子の集団が、俺たちを見ている。嫌な予感がするので、俺は厳戒態勢を敷いていた。

「……どうしたんだ静那？」

と、帝督が俺に聞いた瞬間だった。

「ねぇ君たちカッコイイねぇ」

「お姉さんたちと遊ばない？」

「学校よりもずっと楽しいわよ～？」

はい来たはい来た来ると思ったハイ逆ナン！

「帝督！　悪い俺ちょっとトイレいくから先行ってて！」

はいBダッシュ！

「あ、ちょ、静那待て！　おい！」

けばいお姉さんに囲まれる帝督。君の犠牲は、無駄にしない！

「おい静那！　どうにかしてくれ～～～～～～！」

……ムリ♪

そのまま学校まで全速力で走った俺。まぁぶっちゃけ疲れてない。能力使って酸素の取り入れを最適値に設定したから。

学校の校門を通り、そのまま校舎まで来る。すると、クラス決めの掲示板が貼ってあった。

１-Ｂか。俺の名前は名前順において異常に早いので、上を見るだけですぐに見つけられる。

今回は出席番号一番か。

「あ！　居た静那！　貴様はどこのクラスだったの！？」

「制理か」

二日振りに会ったのは、ホテルの部屋が一緒だった吹寄制理。相変わらず目のやり場に困る体型だな……。

「俺はＢだな。皆の名前を今から探そうとしてたところ」

「そう。私も今から見るんだけど……貴様はＢね……？」

俺もＢから順番にメンバーを探すことにする。お！

１２番　垣根帝督

１３番　重音里奈

３１番　吹寄制理

「良かった！　皆同じクラスじゃないか！」

「そ、そうね！　安心したぁ……」
「安心？　そんなに不安だったのか？」
「う、うるさい！　ほら貴様！　クラスに行くわよ！」
「うぉ！？」

腕を抱え込まれ、そのまま連れ去られるようにして校舎内へと入っていく。女子の制服は一般的なセーラー服だ。
ふむ、制理の髪にはよく似合う。
階段を上っていく。一年の教室は３階のようだ。こりゃ、能力使って飛んでいったほうが楽だな。
……？

「にしても、なんか視線が痛いな」
「貴様気付かないの？　貴様はこの学校で初めての高能力者でしかも序列最強のＬＥＶＥＬ５、おまけにそのルックスよ？　噂にならないほうがおかしいわよ」
「……ふ～ん、俺のルックスはそんなに酷いですか」
「はぁ！？　……あぁ、垣根が言ってたとおりだわ」
「帝督がどうかしたか？」
「なんでもないわよ！　……そういえば垣根は？」
「あぁ、逆ナンされてた」
「……ま、いいわ。ほら着いたわよ」
「おう」

ガラリと引き戸を開けると、ＴＨＥ・教室！　なんの変哲もない、学園ものでよくあるような暖かい感じのする教室だった。……教室だけは。

「……あ～っと。この視線はなに？」

ささっ！　とみんな目を背ける。……助けて制理。
そんなニュアンスを込めた視線を制理に向けると、制理は“任せなさい！”とでも言いそうな強い目をこちらに向けたのち、教卓に立って言った。

「注目！」
「「「「「！？」」」」」

おおう、吹寄さん……豪快だねぇ。

「隣に居るコイツは確かにＬＥＶＥＬ５で序列零位の最強よ！　でも安心しなさい！　仲良く一緒に登校してきた私だけど、ＬＥＶＥＬ０だから。コイツはＬＥＶＥＬに偏見持っているようなそこら辺の屑じゃないから。……というかまぁ、そんなヤツがこの学校来るわけないけどさ」

……制理、優しいな。少し嬉しいよ。そこまで言われると。
周りは一瞬驚いたあと、ちらちら視線を送るだけになった。
と、制理が俺につつっと寄ってきて呟いた。

「貴様からも一言言いなさい」
「マジ？」
「マジ」

……。

「あ、えっと……よろしく？」

全体からほっとした声が漏れた……え？

「普通、高位の能力者は私たちなんかに腰低くしないし、私（ＬＥＶＥＬ０）に間違ってないかな？　なんて視線を送ったりしないからね……色んな意味で安心したのよ」
「俺の立場もめんどくさいな……」

そう微笑みあいながら、俺と制理は席につくことにした。どうやら席は適当でいいらしい。よって俺は窓側真ん中のベストポジションをゲットした。隣には制理が座る。……あれ？　重音は？

「里奈はまだね……あの子ド天然だし」
「誰がド天然ですかぁ」

金髪にセーラー服という、なんとも微妙な格好をした少女がそこにいた。

「おはよう重音」
「おはようございます静那さん、制理さん」
「おはよう里奈」

にっこり笑った重音は、俺の斜め後ろの席に座る。
と、そこで、９：２０となった。帝督よ……間に合わなかったか。

「は～い、ＨＲ始めるぞ～！」

入ってきたのは“体育教師！”って風貌の男性教師。コイツのせいで地球温暖化が進んでるんじゃねぇ？

「んじゃまず俺だ！　俺の名前は勝崎大輝（かつざきだいき）！　２４歳だ！　一年間担任を頼まれた！　なんせ……どっかのバカが大暴れしたら抑えられる教師が俺くらいだといわれたからな！」

「なぜ俺を見るんすか……」

心外だ。俺は暴走するような生徒じゃない。

と……そこでなにやら嫌な予感っつか視線がした俺は、黙って俺の近くの窓を大きく開けた。

「静那……？」

「「「「「「？？？」」」」」」

俺の行動は皆には分からなかったらしい。まぁいいや。3、2、1……

どごーん！

「到着ぅう！」

「翼仕舞え。派手すぎる。っつーかよ、普通遅刻したら前の扉から入ってくるのが基本じゃね？」

「俺の未元物質に、その常識は通用しねぇ」

「いや未元物質関係ないだろ……」

窓枠通りぬけて鮮やかな登場を果たしたのは、我らが幼馴染、垣根帝督。

あまりの状況に皆が声を失っていたのだが……。

「おはよう垣根くん」

「おはよう里奈ちゃん」

重音だけはふっつーに対応していた。

その適応能力だけは高く買っておくよ……。

「……垣根帝督！　遅刻1だはっはっは！」
「先生おかしいだろ！　帝督の登場についてはスルーかおい！！！」
「俺は派手なのが大好きだ！」
「それでいいのか中学教師いいいいいいいいいい！！」

帝督は何事もなかったかのように俺の後ろの席へと座った。あ、ここ空席だったんだ。
ツッコミ疲れた俺も力なく座る。……俺か？　俺が間違ってるのか？

「大丈夫よ静那……貴様は間違ってない」
「ありがとう制理……」

親身になってくれる制理に、感動した。あれ？　目から汗が……。

@

その後入学式を恙無（つつがな）く終わらせた俺たちは、教室に戻って自己紹介をしていた。
席順に自己紹介をするようで、俺たちの中での順番は制理、重音、俺、帝督だ。
制理の前の生徒が紹介を終え、制理へと順がまわってきた。ちなみに言うことは、
名前、出身中学（外部なら外部だけで可）、能力ＬＥＶＥＬ、そ

して何か一言だそうだ。
壇上に立った制理は、胸を張って紹介を始めた。ちなみに胸を張った瞬間全ての男子生徒が目を逸らしたのはご愛嬌。
「３１番、吹寄制理よ。外部出身でさっきも言ったようにＬＥＶＥＬ０だけど、そんなものに臆するつもりはないわ。貴様ら、しっかり私についてきなさい！　まず目標は大覇星祭よ！」
いかつい自己紹介だことで何より……。
制理はそのまま威風堂々と席についた。続いて重音が席を立つ。そのまま壇上へ上り、のんびりと話し始めた。
「１３番の、重音里奈です。外部出身です。能力は水流操作（ハイドロハンド）のＬＥＶＥＬ２でぇ……えっと。よろしくね」
制理の自己紹介で張り詰めた空気が、極限まで抜けた気がする。風船を解いたくらいの勢いで抜けたなこりゃ。
そのまま順々に自己紹介を終え、俺の番になった。
立ち上がると、なにやら注目されている気がする。理由は制理のお陰で分かったけど、なんだかなぁ。
「……静那。大覇星祭についていいなさい」
「なんでだよ」
立ち際に制理が言ったことにため息を吐きつつ、クラスを見渡せる場所に立つ。
うわ、皆見てるよ。
「藍藤。お前と垣根は最後に“なにか質問は？”をつけること！」
「何でですか先生……」

黒板に寄りかかって腕組みしてる勝崎先生に二度目のため息を吐いたあと、俺は口をひらいた。

「1番、藍藤静那だ。外部出身で、法則解析（アナリーロウ）のＬＥＶＥＬ５。……ッツ、大覇星祭がんばろー」

制理が睨んでいたので仕方なく言った。

「……ッツ、何か質問は？」

勝崎先生が目をキラキラさせていたので仕方なく言った。

すると、意外にも３つの手が挙がる。

「じゃあ……えっと、古木田さん」

「えっと……法則解析（アナリーロウ）っていうのは、どんな能力なんですか？」

どんな能力、か。どう説明しようか悩むな。

「難しいこと言ってもいいかな？」

「はい」

「……俺の法則解析は、この世の法則を捻じ曲げる力。重力や抵抗力、圧力や反発力……そしてもちろん電気や素粒子、火炎なども全てだ。例えば炎は酸素を使って燃えるだろ？　その法則を捻じ曲げて、窒素で燃やすこともできるわけだ。それから、相手の能力も捻じ曲げられる。例えば重音の水流操作。この水を操る能力をちょいっと弄るだけで、重音は熱湯しか出せずにダメージを負う。簡単に言えば演算を阻害するんだ。……弱点としては、人体に向けて放てないことか。人の居る空間そのものには効果があっても、直接攻撃は出来ないんだ」

「……うぅ、よく分からないかも」

「ま、そのうち分かるさ……他には？」
「はい」
「えっと……海枝さん」
「その……彼女は居ますか！」
「はい！？」

その質問が飛んだ瞬間、周りから次々と声が上がる。

「付き合ったことはありますか！？」
「彼女居るんですか！？」
「好きな女性のタイプは！？」
「どんな年下と年上と同年代、どれがいいですか！？」

え！？　え！？

「誰か助けて……」
「静かにしなさい貴様ら！」

俺の願いが通じたのか、制理が叱咤してくれた。彼女の一喝があれば収まるだろうと思っていたのだが……。

「本妻が怒った！」
「誰がほほ、本妻か！」
「ええ！？　吹寄さんと付き合ってるんですか！？」
「付き合ってなどいない！」
「巨乳ですか！？　巨乳がいいんですか！？」
「悲痛な叫びを飛ばすな！」
「吹寄さんみたいな強気な子がいいんですか！？」
「……／／／」
「フォローしろよ制理！　なんでそこで赤くなる！」

「あぁ！　名前で呼んでる！」
「い　ぃ！？」
……もう嫌ぁ。
「はいはい、静那の紹介はここまで。次は俺ね」
かみこうりん♪
「助かったよ帝督！」
「まぁ……いい加減イライラしてたしな」
「？」

俺がそそくさと席に着くと、帝督が壇上に立った。
途端、クラスがもう一度静まりかえる。なんか、「垣根さま……」とか恍惚な声も聞こえるが気にしない。気にしたら負けだ。

「１２番、垣根帝督だ。静那とは幼馴染でな、幼稚園からずっと一緒だ。学園都市には中学から、つまり俺の学園都市生活は今日から。能力は未元物質のＬＥＶＥＬ５で、序列は今のところ第二位だ。さて、一言っつってもな……ッツ、大覇星祭がんばろー」

制理が睨んでいた。

「……何か質問は？」
「「「「「「彼女居ますか！？」」」」」」
「……おぉう、予測はしていたが」
「彼女は居ない付き合ったこともない現在好きな女性も居ない好きなタイプは分かりあえる子年下年上同年代なんでもオッケー性格は二の次分かり合える可愛らしい子なら良し！！！」

クラスは一瞬で静まりかえった。……帝督さん、師匠と呼ばせてください。

一瞬の間をおいて、おおおおおおおおおお！　と盛り上がる。男子生徒からはコロセコールが掛かっているが、本人は気付いていないようだ。

そのまま悠々と帰ってくる帝督、いや、お前はすごいよ。イケメンは死ねば良い。

００８　柵川入学（後書き）

なんだか、ギャグ一辺倒になりそうで怖い……

００９　映画にＧＯ！（前書き）

これなんてカオス？

００９　映画にＧＯ！

柵川中学に入学して、最初の休日。
この一週間は本当にいろいろなことがあった。

４月７日　午前９：００

「遅刻だぞ静那！　急げ！」
「うるせぇよ元はといえばお前が朝飯のっそり食ってるからだろ！」
「最愛ちゃんの料理を残せっつーのかテメェ！」
「遅く食うテメェが悪いっつってんだテメェ！」
ガララ！
「遅刻だぞ二人とも、がっはっは！」
「だが俺の未元物質にその常識は「バカ言ってんじゃねえよ帝督、座るぞ」おい静那！　今決めゼリフの途中！」
「知るかぁ！」

４月７日　午後１２：２０

「昼飯にすっか、静那」
「そうだな。どこで食う？」
「屋上でいいんじゃね？」
タッタッタ……
「いやあ、屋上の景色は素晴らしい」
「……おい帝督、ここそういえば鍵掛かってなかったか？　つか進入禁止じゃ……」

「お、俺の未元物質にその常識は通用しねぇ」
「鍵壊したなテメェ！　目ぇ逸らすな！　謝り行くぞ！」
「え、でも飯……」
「あぁもう！」

４月８日　午前８：２０

てーとくだよ！　早くあ・け・て（はぁと）　きゃ、言っちゃった、あは♪

「てんめえええええええ！　さらに性質悪くなってんじゃねぇかこのインターホン！！」
「昨日振り回された腹いせだぁ！」
「ふざけんな！　俺のイメージが著しくおかしくなってるじゃねぇか！　新宿二丁目みてぇじゃねぇか！」
「大丈夫だ」
「何が！？」
「お前ならそこでも生きていけｒ」
「しねえええええええええええええええ！！」

４月８日　午後１５：３０

「静那！」
「およ？　制理じゃん。どうした？」
「そ、その……一緒に帰らない？」
「おう、いくか」
コツ、コツ、コツ……
「なんか、こうしてると恋人みたいじゃない？」

「え？　そ、そうか！？　変なこと言うなよ制理！」
「そんな嫌がらなくても……」
「いや、嫌なわけじゃ……」
ザザザ！
「あん？　なんだテメェら」
「「「「「「「「リア充には正義の鉄槌をぉ！！！」」」」」」」」」
「んな！？　テメェらやる気か！？　……って帝督！？　なんでテメェが混じってんだ！」
「面白そうだから」
「殺す！　コイツだけ殺す！」
「させると思うか！？　皆、リア充を潰すんだ！」
「「「「「「「「「おおおおおお！！！！」」」」」」」」」
「くっそ……こうなりゃしかたがない」
「何する気だ静那！」
「おい皆！　帝督は重音と付き合ってるぞ！」
「なにぃ！？　静那おま……」
「「「「「「「「「「「なぁにぃ……？」」」」」」」」」」」
「お、お、覚えてろ静那ぁあああぁぁぁ……！」
「「「「「「「「「リア充には正義の鉄槌をぉ！」」」」」」」」」

４月９日　午後１２：２５

「昨日は酷い目にあった」
「自業自得だ帝督」
「さて、飯でも食うか」
「……なぁ帝督？」
「ん？」
「なんでまた屋上の鍵ぶっ壊してんだ！」

「見晴らしがいいからだ！」

「鍵なら先生に頼み込んで借りりゃいいだろ！」

「許可してくれるとは限らねぇ」

「確かにそうだけどよ！　だからっておかしいだろ！」

「俺の未元物質にその常識は通用しねぇ」

「キメ台詞大安売りだなテメェ！　そして未元物質関係ねぇ！」

4月10日　午前10：20

「静那」

「どうした制理」

「その……教科書を友人に貸したままで……」

「あぁ見せてやるよ。机寄せるか」

「あ、ありがと……」

「え～、この公式はここがこうでこうなるから結論として答えは」

「「「「「「「「「「リア充に正義の鉄槌をぉ！」」」」」」」」」」

「え？　リア充ではないですよ？　答えは3x……」

「先生気付いて！　いたいけな生徒が一人殺されそうだよ！？」

「む、藍藤くん。授業中は静かに」

「授業中に立ち上がってる生徒が大勢いるんですけどねぇ！？」

4月10日　午後15：25

「酷い目にあった」

「まぁまぁ。仕方ねぇよアレは」

「下校中にため息吐くのは何度目だろうか」

「黄昏てんなよ静那」

「苦笑いしてる時点で理由は分かってるはずですけどね帝督!?」
「そういえば明日は最愛ちゃんとデートだっけ?」
「デートじゃねぇよ。映画見に行くって約束を果たすだけだ」
「そうか……女の子と一緒に映画見に行くのか」
「……帝督?」
「だってよ、皆さん」
「「「「「「「「リア充には正義の鉄槌をぉ!」」」」」」」
」
「みぎゃぁああああああああああああああ!」
「はっはっは! この前のお返しだぁ!」
「明らかに俺がやられてる回数が多すぎですけどねぇ!?」
「俺の未元物質にその常識はt「もう分かったよチクショオオオオオオオオオ!」……キメゼリフなのに」
「吹寄以外にまだ居たか!」
「許せん! この女の敵は排除するしかない!」
「本音は?」
「「「「「「「「「俺もモテてぇよチクショオオオオオオオ!!!」」」」」」」」」
「ねぇ帝督! こいつら明らかに私怨だよ!?」
「今更気付いたか。……なぁ静那」
「なんだよ! 助けてくれんのか!?」
「ご愁傷様」
「このクソ野郎ォォォぉおおおおおおおおおお!!!」
「「「「「逃がすかああああああああああああ!!!」」」」」
」」」」

4月11日、午前8:40

……本当に、いろいろあったな。いろいろと。ていうかほぼ帝督絡みな気がするのは気のせいだろうか……?

俺は最愛が作った朝食を並べながら、ニヒルな笑みを浮かべていた。

「超たそがれてますねお兄ちゃん」
「あぁ……今週はいろいろ有りすぎてな」
「そうですか……学校、怖いところなんですか？」

不安げな表情の最愛。むぅ、これはちとまずいかもな。

「違うって。楽しすぎて遊びつかれて、学校のあとはみんなこうなっちまうのさ……」
「へぇ！　私超楽しみになってきました！」
「そうか。そりゃ良かったよ。制服はいらないから……映画のあとは最愛の私服選びに行こうか」
「はい！」

昨日帝督に言ったとおり、今日は最愛と約束していた映画を見に行く。B級なのが少し惜しいが、学園都市で製作しているものが大半なのでとにかく安い。おまけにいつでもやっているから問題ない。

「「いただきます」」
「そういえばさ、最愛の始業式は今週の月曜だっけ？」
「そうです。９：３０に職員室に来るようにって超言われました」
「なるほどな。俺と帝督で送るから、時間だけは守るように」
「え？　お兄ちゃん超学校じゃないんですか？」
「どうせ俺たちは授業受けなくても楽勝だしな。特に問題はないさ」
「なんだか……超申し訳ないです」
「いいさ。毎日こんな美味しい食事作ってもらってんだ。それに、俺も家族として義務があるから」

「……ありがと」
「おう」

@

「さて、ここか」
「意外に大きいですね」

映画館前に着いた俺と最愛。人はまばらだが入っているようだ。

「良い天気だし、映画よりテーマパークとか行くほうが多いのかもな」
「超始まりそうですよ！」

映画館に入った俺たちは、そのままチケットを買って、シアター前に来る。さってっと。
「最愛ポップコーン食う？」
「超食べます！」

こりゃ二三個買ってあげたほうがいいか？　と思ったあと、最愛の口ぐせが“超”なのを思い出して踏みとどまり、いや、どっちのニュアンスで言ったんだろうと思案した挙句、二人で３つ買うことにした。
ポップコーンのほかに、俺はいつもビンのコーラを買う。カフェイ

ン万歳。大事なシーンの記憶を曖昧にさせないためにも、コイツの存在はかかせない。

「いろいろ規則があるんですね」

「いや、映画を見るときの俺の持論さ。最愛も、映画を良く見るようになったら嫌でも持論を持つようになるよ」

と、俺は苦笑しつつ最愛の頭を撫でた。気持ち良さそうな最愛の顔に一瞬見惚れたのは間違いだ。俺は小学生に欲情するようなロリコンじゃない！　……帝督はどうなんだろ。

シアターに入ると、既に少々暗くなり始めていた。シアター中央から少し後方の席が空いていたので、そこに座る。

最愛はポップコーン片手に、ずいぶんと機嫌がよさそうだった。

「楽しそうだな、最愛」

「超楽しいです！　……お兄ちゃんと初めての……でーと……ですし」

「んにゃ？」

「超超超なんでもありません！」

「そこまでなんでもないことなのか」

「……ところで、タイトルはなんですか？」

「え～っと……ＳＦっぽいな。サイエンスのほうで。いや、魔術を題材にしてるからサイエンスじゃないのか？　いや超科学だからサイエンスでいいのか……とにかくそういう系だ」

「超どういう系か分かりにくいです！」

「……むぅ。あらすじでは、５万冊の魔術書を持つ少女が教会から逃げ出し、それを助けた学園都市の少年が孤軍奮闘、教会を相手取って戦う物語っと」

……未来を少なからず当てている気がするのは俺だけか……？

「意外と面白そうですね。あ、始まるみたいです」

@

一言で言えば、なんつーか茶番だった。俳優の大根加減が居た堪れない。背景や効果音も粗雑だし、ミュージックがずれていることも多少……う～ん、B級以前の問題じゃねえか？

でもまあいいかと思うこともある。

「超面白かったです！　あの手に汗握る展開！　続くんですよねアレ！　超楽しみです！」

と、テンションの高い少女が隣に居るからだ。

なんというか、連れてきて良かったな。うん。

「お昼食べたら、買い物いくか」

「もう一本見に行きましょう！」

「……マジ？」

その後3本見る羽目になったのは、ご愛嬌で済むことだろうか……？

００９　映画にＧＯ！（後書き）

……だんだんと帝督×静那の漫才みたいになってきてる気がする……。

０１０　御坂美琴（前書き）

さァて、“新キャラ”の時間だぜェ！

０１０　御坂美琴

日曜日。最愛と一緒に映画に行った翌日である。
今日は俺一人で、最愛の通う予定である学校を見物してきた。一般の学校にしては中々設備も良かったし、学内の設備は恐らく柵川中よりもずっと上だ。
さて、現在は第七学区にてとある自販機の前……。

「うがぁ！　なんで！？　なんでお金出てこないの！？　ジュースも出ないし！　ああもうどうなってんのよこの自販機！」

小学生くらいの女の子が、その前で頭を抱えてクネクネしていた。
……独り言（一人叫び？）を聞く限り、自販機に入れたお金が呑まれたということだろう。そりゃ不憫だわ。

「お～い、大丈夫か？」
「大丈夫じゃないわよ！　あぁくそ！」
「こらこら女の子がそんなこと言うんじゃありません」

最近の女子小学生は物騒だな、と身内の妹を思い出しつつ俺は考える。だが、俺がそんな風に思考をめぐらせていると、彼女はいきなり帯電し始めた。

「いいわ……それなら電気で無理やり吐いてもらうんだから！」
「ダメだろオイ！」

俺の制止も全く聞かず、自販機に電流を放出する電撃もといビリビリ少女。最近の女子小学生は荒れてるなぁ、と俺は身内の妹を思い出しつつ考える。あれ？　デジャヴ？

と。

「やったぁ！　いっぱいでてきた！」

「おいおい……」

ガッコンガッコンと景気の良いサービスをする自販機……いちごおでん？　誰が飲むんだこんなの。

ビリビリ少女はいそいそとその全てを拾っているけれど、いや～、２０個近いぞコレ。

「アンタに少し譲ってあげるわ」

「１８個もなんで持てるんだキミは？」

俺は余った黒豆サイダーなるものを二つ貰い、嘆息する。どうやら電気を使ってアルミ缶を浮かせているようなんだが……電気って応用性高いのな。

「にしてもキミ、結構な電気系能力者なんだね」

「ふふん、私はＬＥＶＥＬ３の電撃使い。でも、すぐにＬＥＶＥＬ５になってやるんだから！」

そう言って胸を張る女の子は、どこかで見たことあるような……あぁ！　ミサカはミサカはってうるさい女の子にそっくりだ！　……ってことはこの子……御坂美琴？

「そりゃすごいね。頑張ってな」

「当然よ！　それじゃまたね」

１８個もの缶ジュースを持ち歩く姿は異様としか言えなかったが、思わぬ邂逅があったことに苦笑する。

さて、俺も行くか。

「そういえばこの辺、常盤小学校の辺りなんだよな……ちょっち見てくるのもいいかも知れない」

常盤小学校までの道のりは分かっているので、少し歩くことにした。

@

18個の缶ジュースをぶら下げて歩く少女……御坂美琴は、自身の寮に戻るため近道である繁華街を歩いていた。

「さっきの中学生……」

学ランを完全に全開にして、首からネックレスをぶら下げ、おまけに襟足の長い黒髪と。不良少年であることは間違いないのだが、その少年はＬＥＶＥＬ３もの力を持つ電撃を見ても畏怖の一つもしなかった。

同年代や中学一年生程度の人間なら大抵自分を遠ざけるか、あからさまに怯えるかのいずれかなのだが。

「それにしても……はぁ」

先ほどは珍しく自分の強い能力に驚かない少年に会い、意外と気分が良かった美琴だが、現在はその気分が駄々下がりになっても良いほどの事件に遭遇している。

「オラぁ！　動くなよ、動くんじゃねぇぞお前らぁ！」

拳銃を振り回しながら、銀行からずた袋を背負った男が三人出てくる。繁華街に居る人々はみんな手を挙げてフリーズする他なく、その中で美琴は奴らをとっ捕まえるための隙を窺っていた。

……私なら大丈夫。とにかく銃弾に当たらないように、磁力を使って瞬時に近づいて……そのまま奴らを感電させれば勝ち！

そう思った美琴。計画をたたき出した次の瞬間にはもう、動き出していた。

「あ、キミ危ない！」

後ろから男性の声がしたが、気にしない。瞬間的に近寄った美琴は、三人居る強盗のうち一人に電撃を浴びせて感電させる。

「うぎゃ！？」

ＬＥＶＥＬ３もの力を持ってすれば、相手を気絶させることなどたやすい。そのまま他の二人に飛びかかる美琴。

――喰らえ！

美琴はそのまま男に触れて電撃を放った……が。

「残念でした～」

「なんで！？」

美琴の驚愕の声と同時に、蹴り飛ばされる。周りで手を挙げてい

るだけの連中は、美琴を助けようともしない。

「……っく」

「さっきなんで？　とか聞いたよなぁ？　答えは簡単。俺も電撃使いだからだよん」

「……！」

電気の能力者相手には、よっぽど力差がないと電撃の意味がないことくらい、美琴も知っていた。だからこそ、自分の犯したミスを悔やむ。

「が！？」

「オレも居るんだけど、忘れてもらっちゃったかな？」

後ろから蹴り倒され、そのまま足でのしかかられる。

気絶していた男も起き上がり、美琴を二人で囲み始めた。電撃使いの男は、周りに銃口を向けて動けないようにしている。

「このガキ、よくもさっきは……！」

「きゃ！」

腹を蹴られ、悶絶する美琴。目からは涙が溢れてくる。ＬＥＶＥＬ３の電撃使いといえど、まだまだ小学五年生。

大の大人三人に、能力を封じられた状態で勝てるはずもなかった。

「た……すけて……」

「は！　自分からつっこんでおいて何言ってやがる。元々、お前以上の能力者はこの中には居ないみたいだしな」

はっはっはと高笑いする男。電撃使いが振り向き、言う。

「おい、そろそろずらかるよん。警備員(アンチスキル)どもが来たら厄介だから」
「このガキはどうするんで？」
「人質～」
「！　放して！」

電撃使いに引っつかまれ、そのまま連行される美琴。自分の力で解決するどころか、むざむざ人質になったことが美琴にとって一番やるせないことだった。

「助けて！　誰か！」

周りをなみだ目で見ても、目を逸らすことしかしない群衆に美琴は大きなショックを受ける。見捨てられた、という感情は、小学五年生にとってはとてつもない心傷だろう。

「残念だけど、これが現実だよん」
「嘘よ！　そんな……どうして……？」

涙でぐしゃぐしゃになった美琴だが、それでも助けは現われない。でも……と美琴は一縷の希望をかけて、最後に叫んだ。

「助けて！」
「ん？　この声はさっきのビリビリ小学生か？」
「！」

ほとんど希望をなくした美琴が見たのは、なんというか間抜けな少年だった。
群衆が全員でハンズアップして固まっているというのに、少年はずっと地図から目を放さずに群衆と自分たちの間を歩いていたのだ。

……マジか、と美琴は思った。
美琴の声が聞こえたらしい少年は、ふと顔を上げてキョトキョトと周りを見たあと、美琴の姿を視認した。
「……なに、してんだ？」
「！」
その声は、さっきのツッコミ気質満載の声とはかけ離れていた。一番その声に殺気を感じたのは美琴だろう。睨む先は、自分を掴んでいる電撃使いの男だった。
「な、なにってそりゃ……うるせぇ！　死ね！」
少年の放つ殺気に耐えられなかったのだろう、一瞬で少年に向けて発砲した。
「危ない！」
美琴が叫ぶが、少年は動かない。それどころか、銃弾をつまんだ。
「……なんだぁ？　このおもちゃは」
「な！？」
「ぽいっと」
銃弾を可愛らしい効果音付きで捨てた少年は、そのままゆっくりと歩いてくる。全開の学ラン、漆黒で襟足の長い髪。真ん中には綺麗なネックレス。だが、その少年から出ているのは殺気。
「小学生の女の子捕まえて、あまつさえこんななみだ目にさせて、なんだぁ？　それが大人のすることかよコラ」

「っく！　撃つぞ、この女を撃つぞ！？」
「……あぁ！？」
「！？」

男が美琴に銃を突きつけた瞬間。美琴はまたも泣きそうになったが、少年は怒りのオーラを倍増させただけであった。
次の瞬間、少年は足元にあった小石を蹴飛ばす。それは消えたと思ったら、男の腕ごと銃を吹き飛ばしていた。

「ぐぁあああああ！」

男がしゃがみこんでのたうち始めたと同時に少年は動き出す。
美琴を抱き抱え、そのまま三人の男たちから距離をとったかと思うと、言った。

「銀行強盗は嫌いじゃねえ」
「「「は？」」」

一瞬何を言っているのか分からなかったのは、この場に居た全員だろう。だが少年はお構いなしに続けた。

「俺はするのもゴメンだが、お前らはお前らなりに覚悟を決めて飛び込んだんだろうからな。犯罪云々は別として、むしろ色々な意味で尊敬してもいい」
「ちょっと……何を言って」
「だがよぉ、それを止めに入った小さな女の子は、それ以上の覚悟で飛び込んだんだと思うぜ？　この場合、お前らはこの女の子から尻尾巻いて逃げ出すのが正解だ。したら、俺は無視しただろうしな……けどよ」

一旦言葉を切って、少年は言った。次の言葉と同時、男たちには比喩ナシに重圧がのしかかる。

「そんな女の子をいたぶって人質たぁ、覚悟もへったくれもねぇんじゃねぇの？　あぁ！？」

「「「ぐぎゃあああああああ！！！」」」

「な……なにをしているの？」

怯えた美琴は、乾いた口で少年に問いかける。目の前では、目に見えないもので今にも押しつぶされそうな三人組。

「……奴らの居る空間の重力を変えただけ」

「くっそおおおおお！」

美琴に説明をする少年に、電撃使いの電撃が飛来する。だが、少年は一言で片付けた。

「……うぜぇ」

「な！？」

飛来した電撃は、蒸発して消えたのだ。

これには群衆はおろか美琴でさえも何がおきたのか分からない。

「驚くことはねぇだろうよ。電撃に、沸点っつー概念を加えただけだ。ちなみに、４０度で蒸発するようにした」

「そんな！？　おかしいだろ！」

悲壮と凄惨を思い切り表情に出す男に、少年は一言だけ言った。

「法則（ルール）は俺が作り出す」

その瞬間、男たちは押しつぶされた。

数分後、警備員（アンチスキル）が到着すると、少年は忽然と姿を消した。美琴が繁華街内を捜索しても、見当たらない。

だが、収穫があった。あの少年の情報で。

法則解析（アナリーロウ）

少年の能力だ。この世の常識を変えてしまう、天界の片鱗を振るう者。つい最近、有名な能力開発施設が何者かに潰された話は知っていた。それは、天界の片鱗を振るう二人の少年によって行われたものだという。

……そして。

『ふふん、私はＬＥＶＥＬ３の電撃使い。でも、すぐにＬＥＶＥＬ５になってやるんだから！』

『そりゃ凄いね。頑張ってな』

あの少年は、ＬＥＶＥＬ５の第零位。学園都市で敵うものナシと言われている無敵の能力者。

……もう一度、会いたい。

恋愛感情ではなく、無敵の能力者に惹かれた少女が、空を眺めた。

その願いは、またも同じ場所で意外とすぐに叶うことだと、彼女は知らない。

011　幕間　重音里奈の一日（前書き）

短編です

０１１　幕間　重音里奈の一日

おはようございます～。重音里奈です～。
今日は日曜日。土曜日を午後１７：００までずっと寝ちゃってて、休みを満喫することができませんでした……ぐすん。
なので、今日はまったりするぞ～！

……。

……。

……おー。

私一人しか居ないのを忘れてました……。

じゃあ満喫します。
……どうすると満喫なんだろ。うーん。

制理ちゃんに聞いてみよ～！　お～！

……あ、かかった♪

「もしもし制理ちゃん？」
『里奈？　どうしたの？』
「休みを満喫するって、どうやるんですか？」
『休みを満喫～？　それより里奈、宿題やったんでしょうね？』

「……あ」
『やっぱり。しっかり勉強しなさい！』
「ねぇお願い制理ちゃん見せてくだｓ」
『ツーーー、ツーーーー』

切られてしまいました。仕方がないので、仲良しの他二人に電話してみます。

……あ、掛かった！

『んあ？』
「もしもし帝督くん？」
『お～、里奈か。どうした？』
「宿題を見せて欲しいんだけど……」
『宿題～？　あったっけそんなん』
「うん、入学テスト学年二位の帝督くんなら出来てるかなって……だめですか？」
『ダメっつーか、やってねぇしやるつもりもねぇな』
「……え？」
『いや、やる意味ないっしょ、わざわざ家に帰ってまで勉強とか』
「いや、それが学生の本分というか常識というか……」
『俺の未元物質にその常識は通用しねぇ』
「えぇ～～～」

帝督君はダメでした。しかたがないのでもう一人に……。

……かかった。だんだんテンションが低くなっている重音里奈であります……。

「もしもし？」
『もすもす、ひねもす』
「ひねもす！？」
『……ふーあーゆー』
「なぜ英語？　しかも発音最悪！？」
『……重音か、どうした』
「あ、いや、宿題を見せてもらいたくて……」
『宿題～～？　俺がやってるとでも思ってんのか？』
「そんな当たり前みたいに言わないでください！」
『当たり前っつか常識だ常識！　ここ次のテストに出るぞ』
「えええええ！？　……学年一位は宿題をやらない主義なんですか？　どうして一位も二位も……」
『宿題とか……やる意味（笑）』
「自分でかっこ笑いとか言わないでください！　ていうか出された課題はやるのが社会のルールでしょうが！」
『法則（ルール）は俺が作り出す！』
「……もういいです」

どうやら学年一位と二位は、宿題をやる気すらさらさらないみたいです……。
ついでに翌々日にあった宿題確認テスト……あの二人は満点でした。ぐすん。

０１２　四人のＬＥＶＥＬ５　前編（前書き）

長編というほど長くはないですが、スタートです（笑）

０１２　四人のＬＥＶＥＬ５　前編

「さて最愛、準備はいいか？」
「超オッケーです！　学校超楽しみです！」
「さて……帝督がそろそろ来る頃だけど」

プルルルルルルルルルル……

「はい、こちら白式。どうしたんだ鈴？」
『年齢も性別も機体も世界ですら違うんだが。そしてそういうメタ発言は私の前以外では絶対にやめるのだな』
「へいへい……で、どうしたんすか？」
『第十学区にあるとある研究所に、厄介な侵入者が入りそうでな。急がなくても構わない、今日中に第二位と二人で向かってくれ。地図は後ほど渡す』
「俺、今日は最愛の入学っつー大切な式典があるんだけど……」
『だから今日中で良いと言っている。このシスコンめ』
「んなぁ！？　シスコンってのは姉妹に恋愛感情抱いちゃってる危ないやつのことを言うんだぞ！」
『……まあいい。それじゃあ頼む』
「あぁ」

ケータイをパタンと閉じると、最愛が今にも泣きそうな顔でたっていた。

「ブラコンも超ダメなんですか……？」
「？」

てってってってってーとくだ！　Ｙａ！　てってってってってー

とくだ！　Ｙｏ！

「はいはい今開けます」

がちゃ

扉を開けると、帝督が拳をプルプルさせながら立っていた。

「テメェはいい加減懲りろぉおおおおおお！」

@

最愛が転入する河瀬小学校は、柵川中学とそう遠くないところに存在する。昨日の下見でも雰囲気は良かったし、ここでなら最愛も伸び伸びと生活できるだろう。

校門前に到着した最愛は、感嘆の声を漏らしていた。帝督と俺で後ろから苦笑していたのは内緒だ。

職員室へ来い、とのことだったので、最愛を連れて半ば迷子になりながらも職員室へと到着。

担任の名前は“白瀬”と言うらしい。優しそうな女教師であった。少し、若すぎる気もしたが。

「それでは、この子はお預かりしますね」

「よろしくお願いします。最愛、鍵は持ってるよな？」

「はい！　持ってますから超安心してください！」

職員室前で、二言三言かわした後、最愛をおいて帝督と一緒に河瀬小学校をあとにした。

そのまま近くのファミレスに入り、禁煙の窓側席を頼む。

「それで、話ってなんだよ静那」

「あぁ、そうだったな」

ドリンクバーで取ってきたコーラを一口飲んで、俺はケータイを取り出す。帝督はオレンジとアセロラを一個ずつ……店に迷惑がかかるようなバーの取り方をしているが、それについては触れないでおこう。

ちなみに、アレイスターからは、俺との関係を帝督には伏せて置くように言われている。今は帝督に話す必要性も感じないし、黙っていてもいいか。

「知り合いから頼まれてな。俺たちの伝説第二章でもやろうかと思って」

「ん？　……第十学区にある研究所の……侵入者をしとめろ、か。殺せってことか？」

「いや、その辺は適当でいいんじゃないか？　殺しはあまりしたくねぇけど、天秤にかけるってのもあるしな」

なるほど、と頷いた帝督は、アセロラドリンクを一気飲みする。

「んで、その侵入者ってのは？」

「え～っと、お。ＬＥＶＥＬ５の第三位、“反射防壁（リフレクション）”の……西田（にしだ）止通（しどお）ってヤツだな」

「ＬＥＶＥＬ５か。楽しそうだな！」

「んで……ミッションの敗北条件ってのがあるんだが……」
「なんかゲームみてぇだな」
と帝督は笑う。俺が次の言葉を発するまでは。
「一方通行（アクセラレータ）の死亡、または再起不能」
「一方通行！？」
「……なんでも、その研究所でちょうど調整中らしいんだわ。んで、そんな能力の弱まっている第一位を殺してしまおうってのが、先方の考えらしいんだよな」
「……まぁ、戦略としちゃ合ってるか」
「好きくないけどな」
「俺もだ」
一瞬にごった空気が、二人の意見の合致でもう一度緩んだ。

０１３　四人のＬＥＶＥＬ５　中編（前書き）

……いつも思う。俺ダメだ……。

013　四人のLEVEL5　中編

一方通行（アクセラレータ）はその頃、調整として一時“ベクトル操作”以外の能力を封じられていた。つまりは、向きを変えることしかできない、ということだ。

調整内容はそのベクトル操作の角度や精度、そして速度である。

第十学区の研究員は一方通行（アクセラレータ）の能力と脳内構造に興味津々であった。

「っつーか、いつまでかかるンですかァ？　天井クゥン？」

「ひぃ！　もう少し、もう少しですぅ！」

数人の研究員の指揮を取るのは天井という研究員。４人の研究員を動員して、一方通行の調整を行っていた。

が、その時であった。

『侵入者ヲ発見シマシタ、侵入者ヲ発見シマシタ』

「なにぃ？　し、調べてこい！」

天井が命じると、そそくさと一人の研究員が入り口のほうへ走っていく。だが。

「ぎゃあ！」

「はいはーい、皆さんお待ちかねの止通さんですよ～」

「な、ひゃあああ！」

一番最初に逃げ出したのは天井だった。なんせ、調べに行った研究員が一発頭をぶち抜かれて、吹っ飛んで戻ってきたのである。正直、怯えるのは当然かもしれない。

追うように研究員たちは次々と逃げていくが、それを反射防壁（リフレクション）は

無視していた。

「……やぁ一方通行、また会えて嬉しいよ」

「あァ？　テメェか三下。俺は今専ら、俺より強ェとか言う第零位のことしか考えちゃいねェンだ。テメェなンざ覚えてねェよ」

赤い髪に長点上機の制服を着た男は、嗤う。

「今の状態で止通さんにケンカ売るってのも、大した根性だと思うよ？」

「うるせェ。三下はどこまで行っても三下だァ」

「へぇ……そう」

赤髪の男……西田止通はこの第一位がひどく気に入らなかった。いや、もっといえば自分より高位の能力者全てかもしれない。垣根帝督が入学したことで自分は第三位に落ちたわけだし、とにかく高位能力者が気に入らない。

「でもまぁ、そんなセリフ吐いていられるのも今のうちだけだと思うけどね」

そう言って止通は拳を叩き合せる。……手甲が嵌められていた。それも手首までガッチリ覆うタイプの。

「で？　そンなチャチなグローブでこの俺を殺せるとでも思ってンのかァ？」

「違うんだよなぁ……まぁいいや、死ねよ」

瞬間、動き出したのは止通。一方通行はそれをただ突っ立ったまま待ち受けた。鉄拳が一方通行の胸部に激突する。

「なンですかァ？　そンなンで俺を殺せるとでも……思ってンのか！？　あァ！？」
「うるさいなぁ……まぁいい。じゃあな」
「ッ！？」

瞬間、拳が爆発した……否、拳と一方通行の胸部の間にあった空間そのものが破裂した。そして、一方通行の反射も効いていない。

「な……」
「驚いてるのか。簡単なことだよ。僕の能力“反射障壁（リフレクション）”は、阻害する物体がない空間であればどこへでも反射の壁を張る事が出来る。それを僕の拳に纏うと、一方通行の反射とぶつかるよね？　あとはそこで起きた衝撃を逃がさないために、周りに反射の膜を張るんだ。すると、僕の拳のせいで圧縮ドカン。もっと簡単に言えば、僕と一方通行の間に風船を挟んだようなものだ。だから……キミの反射も同時に壊した」
「……反射が壊れるだ？　バカなこと言ってンじゃねェよ」
「だから、僕の能力は反射防壁なんだって。反射の壁に関することなら、キミよりずっと上なんだよ？　というわけで……死んでくれると嬉しいな」

またも止通の拳が唸る。格闘術に長けていない一方通行はガムシャラに避けてはいるものの、当たった瞬時に爆発のダメージを負うのでは動きも緩慢になってくる。

「クソ野郎……」
「ほらほら、鼻血ぶーたれてそんなこと言っても全然カッコつかないって」
「テメェは死体決定だクソがァ！」

一方通行の反撃。運動量のベクトルを止通に向けた一撃は、止通の顔面に向かって突き進む。だが……

「いやぁ、愚策っしょ」

反転、止通はその拳に自らの鉄拳をぶつけた。瞬間、一方通行の拳が爆発する。

「がぐああ！」

「なっさけないな、第一位」

「！」

カウンター、とでもいうような止通の逆手が、一方通行の右頬をぶん殴った。そしてまた……。

「おごぁ！？」

起爆。余裕そうな止通とは裏腹に、一方通行はやけどと打撲でふらふらだ。

「加速装置（アクセラレイター）の使えない一方通行（アクセラレータ）なんぞこんなもんか……。もういいや、僕も飽きた」

ため息を吐く止通。だが、一方通行はまだ諦めていない。

「テメェが死ぬンだよ三下ぁあああああああああ！」

「あ？」

止通が首をかしげたのも束の間、一方通行はその場にあった機械

を勢いよく殴りつける。それは一瞬にして熱を帯び、破裂の様相を深めていく。

「な……お前……」

「いくら反射があったところで、酸素が無くなった地下で生きれるとでも思ってンのか？　俺は抜け道を知ってるけどなァ」

「逃げるつもりか！？」

「違う。生き埋めにするだけだァ」

一方通行が言った瞬間、地下研究所は炎で埋め尽くされた。

０１３　四人のＬＥＶＥＬ５　中編（後書き）

戦闘描写の酷さ……泣

０１４　四人のＬＥＶＥＬ５　後編

「く……そ……」

酸素欠乏で倒れそうな男が居た。ＬＥＶＥＬ５の第三位、反射防壁（リフレクション）の西田止通である。

なんとか地下から脱出した止通は、研究所外の敷地内から寮に帰ろうとしているところだった。

「……ひとまず、寮に帰らないと。一方通行を殺すのはその後だ……」

ふらふらと、止通は歩く。そのうちに酸素も戻ってきて、だんだんと歩きも安定してきていた。

このあとどう一方通行を殺すかだけを考えていた止通は、向こうから歩いてくる二人組の会話にふと気付いた。

「おいおい帝督、研究所燃えてんじゃん」

「そうだな、一方通行は……こりゃ死んだか？」

二人とも学ランを全開にし、髪も長い。茶髪と黒髪の違いが一番目立つ。顔の造形も、二人とも全く違うがイケメンという部類としては一緒だろう。

「あん？　お前が第三位か？」

黒髪のほうが言う。

「お前らは……？」

「あぁ、知り合いの頼みでな……一方通行の居る研究施設に侵入した男を殺せとよ」
「！」
反射的に後方へ飛び下がる止通。こいつらは第三位と知っていて殺しにかかっている。だとすると、なんらかの対策を打たれている可能性が高い。
「つっても、ふらふらじゃねぇかコイツ」
「静那、いいから潰して、一方通行の様子でも見に行こう」
「分かった」
「まさか……お前ら」
静那、という名に、止通は気がついた。最近現われた第零位――藍藤静那。そして、いつも一緒に居るのは垣根帝督。こちらも第二位のＬＥＶＥＬ５。
乾いた笑みが、止通の表情を覆う。思えば、大嫌いな高位能力者が全員、自分の周りに集まっている。
「殺すわ……ガキども」
「あ～、やっぱりお前が侵入者？」
藍藤静那の質問に止通は黙って頷くと、同時に垣根帝督に向かって走り出した。
それを視認した垣根帝督は口角を吊り上げる。
「テメェの能力は、全てを反射する絶対防壁……それを何もない空間中のどこにでも張れるんだったな？」
「？」

疑問を抱く西田止通に対し、垣根帝督は背から、大きな三対の翼を現わした。
そのまま少し浮いた垣根帝督は、その翼を振るって言った。
「じゃあその反射防壁、張らせなくしちまうのが一番手っ取り早いな」
「何を！？」
瞬間、垣根帝督の翼を通った光によって、空間が埋め尽くされていく。
「何もない、と思ったはずのところで溺れる気分はどうだ？」
「もががが！」
「空気中の塵を集めただけだ。本当に何もない空間、なんてのはこの世界にほとんどない。ましてやこんな路上で、何もない空間なんてのがあるはずもない。お前の反射防壁は、無意識にその塵どもを避けて展開されてんだ」
「……！」
「なら話は簡単だ。反射防壁を張れないほど、物体で埋め尽くしてしまえばいい」
「くそ……」
「雨水ってよ」
「？」
「一粒の塵を中心に水分が集束したものだってことは知ってるよな？　……お前は塵だ」
「！」
垣根帝督は笑って言った。第三位という塵を使って、空気中の塵、という雨水を集めている。未元物質による光で磁力を持った塵が、

第三位という磁石にひっつく。
「あとはまぁ……静那が燃やせば終わりか」
「えぐいことするのな、お前」
呟いた藍藤静那は、そのまま塵の集束している第三位に向けて手をかざした。
「結局殺すのかよ。じゃあな……第三位」
どこからともなく燃え始めた塵は、粉塵爆発の要領で一瞬にして爆発……爆発を利用して襲撃を行った第三位は、爆発によってその生涯を閉じた。

@

『これで第三位を空位に出来た』
「それがそんなに大事だったんスか？」
『いや……』
「まぁとにかく一方通行は生きてたらしいし、いいっスよね？」
『あぁ。問題ない』
「……知り合いはなんだって？」
「助かったってさ」

現在俺は、帝督と一緒に朝のファミレスへと戻ってきていた。
一方通行は倒れていたものの無事だったらしいし、アレイスターさんも文句はないと思う。

「にしても、第三位呆気なかった」

ジュゴゴゴとストローの音を鳴らしながら、嘆息したように帝督は言った。
俺はむしろそれにため息を吐く。

「いいじゃないか。無駄に苦戦したくねぇし」
「よくねぇよ……伝説ってほど残らねぇよコレ？」
「どうも一方通行が相当体力削ったらしいからね……実質第三位にとっては、上位のＬＥＶＥＬ５と三連戦もいいところだったんじゃないか？」
「……にしてもなぁ」

満足のいかなそうな帝督に俺は苦笑した。

015　柵川祭？（前書き）

少し時間が飛びます。

０１５　柵川祭？

七月にもなると、色々と学校にもなじんでくる。
俺と帝督の存在も最初でこそ騒がれたが、今は見知らぬ人に軽く会釈されるくらいになったと思う……のだけれどさぁ。

「学校見学申請の量が尋常じゃないからね……一つキミ達に頼みがあるんだよ」

校長室。俺と帝督は二人並んで革張りのソファに腰掛けていた。正面には校長先生。俺たちが入学するっつった時に泣いて喜んでいた人だ。

「それで……独自の文化祭を決めたわけですか……」

帝督がため息交じりにそう言った。俺は紅茶を手に取りつつ、事態をまとめる。
発端は今月の初めにクラス委員長（制理）が言った一言だった。

「柵川祭っていう文化祭を今月末にやるそうよ」

これである。まず皆ポカンとしたあと、どよめきが一瞬で広がった。
俺と帝督が入学してしまったことで、柵川中学は一躍有名校になってしまったらしい。それで観光会社やら小学校やらからの学校見学の申し込み量が尋常ではなく、ならもういっそ文化祭でもやってしまえ！　というのが生徒会の出した結論だった、と。

「俺らが悪いのかなぁ……」

「天井を仰ぐな静那」

帝督に苦笑されて俺は校長に向き直った。申し訳無さそうな顔をしていることから、俺たちに何かをやらせる気満々なのが窺えて嫌になる。

「……それで？　俺たちに何をしろと」

「話が早くて助かるよ。君たちには軽く芝居を打つような感覚で、校庭で勝負をして欲しいんだ」

「周りの観客死にますよ？」

「ナチュラルにそういうことを言うな帝督」

帝督の発言に、ハンカチで額を拭く校長先生。本当に悩んでるんだろうな……。

とはいえ、俺たちに代案があるかといえばそうでもない。元々俺や帝督の能力は、ただの一般人には理解しにくいだろうし……帝督のは派手だからそれだけで盛り上がるかも知れないけれど。

それかあとは……

「校舎を的にすれば派手にもなるけど……」

「やめろ静那。校長先生が涙目だ」

どうすればいいかねぇ……。

「じゃあ、一つ提案があるんだが聞いてくれるか？」

涙を拭いた校長先生が人差し指を出して言った。

「二人で打ち合わせとかして、パフォーマンスをやって見るというのは？」

「「パフォーマンス？」」

@

「って話になっちゃってさぁ」
「パフォーマンスですか……超楽しみではありますけど」

夕飯の席で、最愛にことの顛末を話してみた。最愛は漬物をポリポリ食べながら、どんなのが良いか考えてくれる。

「やっぱB級映画にありがちな超アクション系か……」
「あ、ショーにする気ですか貴女は」
「超良いと思いますよ！　アクション！　超悪の権化藍藤静那をやっつける！　的な」
「俺って超悪の権化だったんだ……」

軽くショックでへこむ。味噌汁を啜りながら、でもアクションショーも悪くないかと考える。

「だがそこへ、悪の権化の右腕、垣根帝督が現われて……」
「あ、帝督もこっちサイドなんだ！？」
「垣根帝督の配下には、最愛ちゃんという可愛らしい悪魔が！」
「最愛入ってきちゃった！？」
「校長先生は立ち向かう！」

「ヒーロー校長かよ！」
「じゃあゴレンジャーでも出します？」
「出さねぇよ！　なんで俺も帝督も悪なんだよ！　ヒーローコテンパンにする自信あるぞオイ！」
「可愛い小学生の女の子だったら？」
「ソッコーでやられてあげましょう！」
「じゃあ私超ヒーローで」
「誘導尋問だったのかよ！？」

でもまぁ……帝督にヒーローやらせて、適当に俺が観客攫ってっていうのでもいっか。かなり投げやりだけど。

「花火みたいに超綺麗なのもありですね」
「あぁなるほど。パレードみたいな感じね？」
「校長先生打ち上げたり」
「そっち！？　校長打ち上げちゃうの！？」
「帝督さんでも良いけど――」
「良いんだ！？　帝督打ち上げていいんだ！？」
「――超嫌がるでしょうし」
「誰だって超嫌がるだろうよ！」
「火薬詰め込むの辞めれば承諾してくれるでしょうか？」
「火薬詰め込む気でいたんだ！？」
「でも派手にババーンって超やりたいですよね」
「挙句花火みたいに破裂させる気だったんだ！？」
「夏の風物詩ですから」
「打ち上げ校長が！？」
「校長先生なら悔いなしで打ちあがってくれそうですよね」
「失礼なこと言うな！」
「打ち上げられて派手に臨終なら、校長生活の幕引きにはいいかと」
「嫌だよそんな校長生活！」

……最愛は、いつからこんな黒いキャラに……うう、お兄ちゃん泣きそう。

とにかく、パレード的なのとヒーローショーと。どっちがいいか明日、帝督に話してみよう。

016　来客（前書き）

お待たせいたしました！

016　来客

今日は休日である。俺は帝督と待ち合わせをして、喫茶店で打ち合わせていた。
ウインナーコーヒー片手に、帝督は言う。
「パレード的なのと、ヒーローショーねぇ……」
「どうだろ？」
「いや、どっちも悪くはないんだが……あ、一応俺もケータイのメモに数個書いといたんだ。ちょっと待て送る」
そそくさとディープレッドのケータイを取り出した帝督。一応俺も黒いケータイを取り出してテーブルの上に置く。
「……よし、送信」
「来るかな……」
てーとくだよ！　早く見て！　ぼくさみしい！
「「……」」
空気が痛い。何コレ怖い。帝督の殺気が尋常じゃない。
「お前は昨日の、今日の話のメールもこの音で着信してやがったのか……？」
「あ～……えと……ＹＥＳ！　高須くりにっ「死ね」ぎゃあああああああああああああああ！」
酷いよ帝督……なんで熱いコーヒーカップを俺の手の甲に押し付

けたりするの？
「……まぁいい。いや良くはねぇや、さっさと着信音変えておけ。……んで、どうだ？」
「そうだな……」

帝督の文章の中には、ヒーローショーやパレードもあった。他にも二つくらい……。

「この“校庭を消す”ってのはなんだ？　悪意を感じるんだけど」
「見たまんまだ。校庭を的にしてしまえば、害はないだろうと思ってな」
「地震って言葉ご存じない？」
「……たまに辞書に書いてあったりするな」

視線を逸らす帝督。……さて。

「どうするよ、コレ」
「……う～ん」

二人して悩むものの、全くといっていいほどアイデアが出ない。
どうしたものか。

「……誰かが障壁を張れれば、俺と帝督のバトルも出来るんだがな」
「第三位のこと言ってんのか？　俺たちの攻撃を止められるようなやつ、そうそう居ないって」
「……だよなぁ」
「まぁ来週の今日までに考えればいい話だ。少し考えとこうぜ」
「そだな」

それぞれ勘定を済ませて、外へと出る。時刻は大体お昼前だ。
と、横から帝督が聞いてくる。

「このあとどうするよ」
「う～ん、今日は最愛が家に居るから。お昼準備してくれてるだろうし、戻るよ」
「俺も行っていいか？」
「いいだろ別に。二人も三人も変わらないさ」
「邪魔にならないか聞いたつもりだったんだが……」

@

最愛がお昼ご飯の準備をしながら兄の帰りを待っていると。
お星がキラキラ舞い降りる天使！　今日も華麗に魔法を使うよ！
魔法少女、てーとくん！

「はいはい今あけます～」

トテトテと駆けていく最愛。

「てんめええええええええええええええええええ！」
「あぁもう毎度のことだからいいだろうが！」
「もはや性別まで変わってっし！　しかもなんだてーとくんってよ

！　某奈良遷都キャラクターのパクリかコルァ！」
「安心しろ、パクったのは向こうだ」
「そういう話じゃねぇよ！　そして平然と嘘ついてんじゃねぇ！」
「いいじゃねぇか魔法少女」
「どういう思考回路してやがる！　頭ン中おかしいだろ！」
「学園都市に弄られたからな……」
「そういう話じゃねぇえええええ！」

向こうから、漫才みたいな声が響いてくる。最愛も、よくあんなふざけたインターフォンをスルーできるものだ。
最も、いつ兄がフォンの音声を変えているかには興味があったりするのだが。

「お帰りなさい」
「おう、ただいま！」

言いつつ、奥の部屋へと学ランを片付けに行く静那。後ろを行く帝督は、最愛に悪戯顔で呟いた。

「ごめんな……愛の巣に邪魔しちゃって」
「ひゃう！？」

そのまま静那を追いかけて帝督もソファに学ランを投げ捨てる。
後ろの最愛はと言うと……

「お、お兄ちゃんと……愛の巣ってひゃう……うぅ、でも…超二人きりなんだし愛の巣？　……フフ♪」

真っ赤な頬に手を当ててクネクネしていた。
すると、いつの間にか台所に居た静那が言う。

「お～い、パスタ伸びるぞコレ」
「あぁ！　ごめんなさい！」
「いやいいけど……」

そう言いつつ、静那は茹で上がったパスタをざるに上げ、ミートソースの鍋を覗き込む。

「うまそ……最愛皿出して」
「はい！」

最愛が皿を渡し、それを静那が盛り付けていく。テーブルから見ていた帝督は、またも悪戯顔で最愛にだけ聞こえるように物質をばら撒いて言った。

「うわ～、新婚さんみてぇ」

「はひゃう！？」
「……？　どうした最愛？」
「し…しんこ……しんこ……」

振り返ると真っ赤になった最愛が居た、そんな状況に置かれた静那は一瞬怪訝な顔をするが、首を傾げて盛り付けに戻った。

「お新香はパスタにゃあわないと思うけど」
「っ～～～～～～～～～！」
「……静那テメェ……」

後ろで顔を隠すようにうずくまる最愛と、ため息と殺気を同時に放つ帝督。……いったいなんなんだ、と静那は首を傾げていた。

@

パスタを食べ終えて一時休息を兼ねて紅茶を啜っていた俺たち。
そんな時、インターフォンが鳴った。

T・E・ー（ハイフン）・T・O・K・U　GO！　YAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！

「はいはい、今あけます～～」

パタパタ駆けていく最愛。のんびり紅茶を啜り続ける俺と、ティーカップをプルプル振るわせる帝督。
おかんとぼくと、時々おとん、的な状態かね？

「……静那、説明してもらおうか」
「……手短に」
「まず誰が来てもインターフォンはアレなのか！？」
「まぁ。気分だな」
「そしてなんでー（ハイフン）なんだよ！　普通Iだろ！？　それだと“帝督”じゃなくて“てーとく”になる…ってソレが狙いかあああああああああああああ！」
「一人で何言ってんだ？」
「肩すくめて紅茶飲むとかどれだけバカにしてんだテメェ！」

二人でギャーギャー言っていられたのも、その間だけだった。
奥のほう……最愛が向かったほうからも、不穏なオーラが漂ってきたからである。

「……なんだ？」
「行くぞ静那」
「おう」

０１７　逃亡の先で（前書き）

お待たせいたしました。
とある無敵の法則解析の今後について活動報告しておりますので、
参照ください。
では、どうぞ！

017　逃亡の先で

トテトテと、俺と帝督が玄関に行く。するとそこには……

修羅が二人。

ｏｈ……

「ｏｈじゃねぇよエセアメリカン」

「的確なツッコミありがとう帝督」

さて、気が抜けた点が一つと、緊迫した点が一つ。

まず、気が抜けた点。

来客が、知人だったことだ。吹寄制理……俺のクラスメートである。

次に、緊迫した点。何故か……最愛との間に火花が散っていることだ……。

「何事ですかこれは」

「さぁな……お前絡みなのは百パーセントだが」

恐る恐る近づく俺たち。同時に、地を揺るがすような声が聞こえてきた。

「なんで……静那の家に女が居るのかしら……？」

「超直感で私の敵ですねアンタ……」

……本当に何事ですかこれは。

「あの～……」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「貴様は黙っていなさい！」

「怖いよ帝督！　俺の友達に修羅が憑依してるよぅ！」

「そのキャラも良く分からねぇが……まぁとりあえず、制理に上が

ってもらえ」

@

我が家のテーブルは現在、尋常でない殺気に震えていた。これぞまさにてー“ぶる”なんちゃって。

「静那」
「どうした帝督」
「死ぬか？」
「なんで！？」

この雰囲気でくだらないことを考えたのが気に障ったらしい俺の正面の方。右手を俺に向けた帝督はため息をついて、「で」と切り出した。

「いい加減、なんか喋れ」

俺の隣に居る最愛と、斜向かいの制理に言った。
なんというか……二人の睨みあいはずっと続いていた。

「……お兄ちゃんと私の愛の巣に超なんの用ですか？」
「何が愛の巣よ……というかいつから妹が居たのかしら静那？」
ギロリ、と制理の視線がこちらに向く。うぇ～っと……。
「入学する少し前？」
「へぇ……で？　愛の巣ってどういうこと？」
「いや、それはただ単に帝督が最愛をからかっているだk」
「お兄ちゃん！　私はそんな風には超思ってません！」
「……だ、そうよ静那」
「うぇ～……」
「昼ドラを見てる気分だな」
「笑顔でサムズアップしてんじゃねぇ！」
っく、味方が居ない。というかなんで二人はそんなに怒ってるんだ！？
「今、なんでそんなに怒ってるんだ？　とか思ったでしょ貴様」
「う！」
「お兄ちゃん？　まさか超本当に分かってないんですか？」
「俺殺されそうだよ助けて帝督！」
正面を向くと、帝督はサムズアップしたまま固まっていた。……
そうか、助けるつもりなんざさらさらないってか。
ならば！　三十六計逃げるに如かず！
廊下に飛び出し、俺は逃げる！
「あぁお兄ちゃん！」
「静那待ちなさいよ貴様！」
「あ、おい俺をこんな修羅場に置き去りにするな！」

知るかってんだよチクショー！

@

「はぁ、はぁ……酷い目にあった」

第七学区が一望できる休憩場所まで逃げてきた俺は、膝に手を付いて呼吸を整えていた。

とにかく……ジュースでも飲もう。

そこにあった自販機に小銭を入れ……

「うぉっとぉ！」

危ねぇ。これは確か御坂が金を呑まれた自販機じゃねぇか……。

「喉渇いたなぁ……」
「これでいい？」
ぽん、と缶ジュースが飛んでくる。キャッチすると、ヤシの実サイダー、と書いてあった。
「サンキュー……およ？」
「久しぶり……でもないわね」
目の前に居たのは御坂美琴。噂をすれば影、とはよく言ったものだ。
「ビリビリ小学生じゃねぇか」
「御坂美琴！　そういえば名乗ってなかったわね。常盤小学校五年生よ」
「あぁ、常盤なんだ」
そう言いつつベンチに座ると、少し距離を空けて御坂も座った。彼女の手にも、ヤシの実サイダーが握られている。
プシュッと二人で小気味良い音を鳴らし、一口。む。
「これかなり美味いな」
「でしょ！？　……と」
一瞬キラキラした目を戻し、真面目な顔で俺に向き直る御坂。
「この前はありがとね」
「別に、礼を言われるようなことはしてないさ」
「そう……。それで、アンタの名前知らないんだけど」

「おっと、悪い。俺は藍藤静那。柵川中学の1年生だ」
「柵川……じゃあ近くなのね」

もう一口ヤシの実サイダーを飲んだ御坂は、呟くように言った。

「自慢……とかしないのね」
「自慢？」
「だってアンタ、ＬＥＶＥＬ５の第零位なんでしょ？」
「あぁ、そういうことか。……お前もＬＥＶＥＬが上がるにつれて分かるようになると思うぜ。あんまりＬＥＶＥＬをひけらかすのも、面白くないって」
「面白くない？」
「だって、高位能力者ってだけで遠ざけるヤツも居るしな。その中に、もしかしたら面白い人間だって居るかもしれないし。出会いを減らすのは寂しいじゃん」
「……分からないけど」
「いずれ分かるさ。お前、ＬＥＶＥＬ５になるんだろ？」
「！　うん！」
「なら、いずれな」

ヤシの実サイダーを一気飲みして、俺は立ち上がる。重力で缶を圧縮して、ゴミ箱に捨てた。
そこで、御坂も立ち上がった。

「ねぇ藍藤」
「ん？」
「私がＬＥＶＥＬ５になったらさ。一度勝負してよ」
「……分かった。死なない程度にな」
「約束よ！」

走り去っていく御坂。さて、俺も帰るか。

……帰る、しかないのか。修羅場に。

ため息を一つして、晴空を仰いだ。

017　逃亡の先で（後書き）

ヒロイン選考、是非投票ください！

０１８　柵川祭！（前書き）

沢山の投票ありがとうございます！
まだまだ続くよ♪　……やべぇ、一瞬で自己嫌悪に陥った。

ただいまの候補三名。

麦のん
ねーちん
みこと

……怖いよ怖いよこのメンツ！
浮気とか見つかったら一瞬で消し炭だよぅ！

さてんさんと五和が次いで追いかけてる形。ほかのみなさんもがんばれ！

０１８　柵川祭！

入学希望先の中学が、何やら凄く人気になってしまったようなんです。

なんでも、ＬＥＶＥＬ５が一気に二人も入学したらしく、そのせいで高位能力者の人たちもこぞって希望するようになってしまったからだとか。うぅ、益々入る学校が狭まるなぁ。

でもそのおかげもあって、その学校では独自の文化祭を開催するようなのよね……。

それが今日。私も一応まだこの学校を諦めたわけじゃないんだし、見に行こうというわけで、校門前までやってきました。

にしても……。

「凄い人だなぁ」

私の背丈ほどしかない門のはずなのに、大きくアーチが作られています。“ようこそ柵川へ”……デカデカと描かれた文字に一瞬見入っっちゃいました。チケット配りの人たちも忙しそうだなぁ。まだ九時だというのに溢れんばかりの人が敷地内へと入っていきます。

それにしても、私より少し年上のお兄さんお姉さんが多いようです。六年生の先輩たちかな？

来年の中学だもんね……柵川祭は第一回だし、初めて中学校に入る人が多いんじゃないかなぁ。

と、私が門を潜る番だ。

……ふぇ～、美人さんです。綺麗な金髪ウェーブの可愛らしい人です。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

パンフレットを受け取って、私がそのまま潜り抜けようとしたときでした。

「里奈！　あいつら見なかった！？」

今度も美人さんです。すらっとした肢体に、黒いロングのしなやかな髪。お、おっぱいが大きいです。中学生、憧れちゃうなぁ。

「ふぇ？　えと、あいつらって誰？」

「あぁもう！　静那と垣根よ！」

「えと……私は見てないなぁ」

どうやら人探しのようです。黒髪の人は、ため息を吐いてセーラー服を翻しました。一般の方の視線が集まるのも気にしないのか、ツカツカと歩いて校舎のほうへと行ってしまいました。

「まぁ気を取り直して！　ごー！」

ＬＥＶＥＬ５の催し物もあるらしいし、楽しみだな♪

校舎の前につくと、案内板があります。色々あるみたいだなぁ。とりあえずかたっぱしから回ってみよ！

飲食のお店が多いですね。たこ焼き美味しかったなぁ。……ちょっとトイレいきたいかも。

というわけで、少しトイレを探すことにします。

「静那ぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

！？　な、なに！？　凄い声が聞こえました。結構かっこいい声だったな……。
次の瞬間、廊下向こうの曲がり角から一人の生徒さんらしき人が現れました。壁に張り付きましたね。黒髪ボサボサで、学ランは全開。あれが中学に居るっていう不良かな！
どうやら自分の来た道を伺っているようです。こちらから見ているとさながらドラマの刑事さんみたいです。アンパンは咥えてないですけど。
と思ったら一瞬で顔をこちらへ引込めました。ドタドタ走ってくる音が、先ほど不良さんが見ていた方から聞こえてきます。
茶髪のモデルみたいな人が角を物凄いスピードでまがってきました。
壁に張り付いてる不良さんには気づいてないみたいです。そのまま走ってあ、足ひっかけられた。こけた。

「ざまァｗｗｗｗ」
「ぐぉ……ムカついたぞコルァアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
足を引っかけた不良さんは、全速力でこちらへ……へ？　こっち！？
こっちに向かってくる不良さんと目があいました……あ、かっこいい。ですが……
後ろから鬼の形相でモデルさんみたいな茶髪の人が追いかけてきてるんですが！？
「およ？　おにゃのこだ」

おにゃのこ？

「とりあえずここにいると……危ないよ！」

「ひゃう！？」

はわわわ一瞬で抱きかかえられてしまいました。

お姫様抱っこされちゃってるよ私！

「とりあえず、怖いから後ろは向かないようにしろよ？」

「へ？　後ろ？」

急にそんなことを言われて、やっぱり見ちゃうのが好奇心。

……みぎゃあああああああああああ！

三対の翼を生やした茶髪の人が、低空飛行で飛んできます。怖い！　怖すぎる！

「な、なんで翼が……！？」

「あぁ、見ちゃったか」

「静那ぁあああああああああああああああああああ！」

私たちはそのまま階段を……翔けた。誤字じゃないです、翔けました。もうどうなってるのこの人もあの人も！

屋上にまで逃げたところで、どうやら茶髪の人は追いかけるのを辞めたようです。

「全く、何部屋か逃げれば大丈夫とか、帝督お前は青鬼か」

「……？」

「あぁいや、なんでもない。巻き込んじまって悪かったな」

バツが悪そうな顔で笑い、後頭部を掻くその人。……なんだかとてもさわやか系。

「俺は藍藤静那ってんだ。君は？」

「はひ！　佐天涙子って言いますです！」

「そか、じゃあ佐天さん、巻き込んじゃってごめんな。また今度埋め合わせはするから～！」

「へ……ってここ屋上じゃ！？」

なんとジャンプして飛び降りてしまいました。

その時、バン！　と音がしてさっきの茶髪の人が屋上へと入ってきました。

「静ｎ……あれ君はさっき」

「はひ！？」

怖いです怖いです怖いですぅ！

「そんなに怖がらなくても平気だよ。巻き込んで悪かった。静那の野郎は？」

「と、飛び降りました！」

「マジか」

下手をすれば命にかかわることなのに、茶髪の人はなんでもないようにそう言ったあと、自分も飛び降りていきました。

「あれ……？　柵川中学って、こういうところなのかなぁ」

なんだか、不安が募ります。

@

ふぅ、ふぅ。酷い目にあった。

制理に問われた遅刻の罪（俺の寝坊が原因）、全部帝督になすりつけたらアイツ、真後ろに居た。笑えね。

なんか女の子巻き添えにしちゃったなぁ。ダイジョブかなあの子。佐天さん、だっけ。原作で絡んできた気もしないではないんだが、何せ１０年以上前の知識。覚えてろっつーほうが無理な話だ。

あぁ、そういえば今日は柵川祭。クラスでは普通にたこ焼き屋をやっている。制理が黒豆味を作ろうとしてたけど、まぁ無理だろ。まずそうだし。

問題は出し物。結局、演武染みた戦いを俺と帝督ですることになったんだが……アイツ本気でかかってくる気がするのは俺だけか？

するっと袖を捲って、時間を確認する。演武は１１：００から。

今は１０：２０だから……まぁ、まったりしてたらすぐに時間過ぎちゃうな。

「どうしようかな。暇だし」
「お兄ちゃん、何してるんですか？」
「あん？」

後ろからの声に振り向くと、居たのは我が妹最愛。そういえば、超絶対お兄ちゃんのイベント見に行きます！　とか言ってたっけ。

「時間あるし、散歩と洒落込んでた」
「じゃあ、私もいっしょでいいですか？」
「そだな、行こうか」

華が咲いたような笑みで頷く最愛。うん、やっぱり女の子は笑顔がいいね。

「じゃあ、どこから回ろうか」

@

１１：００ＡＭ　校庭にはバリケードが張られ、さながら即席のコロセウムとなっていた。そこに対峙するは、柵川……ひいては学園都市トップの能力者二人。第二位　未元物質と、第零位　法則解析である。

「……ってあの二人だったんですかぁ！？」

思わず佐天は叫ぶ。なにせ、さっきまでバカバカしい鬼ごっこに付き合っていたのだ。その二人がまさか学園都市トップの能力者だとは到底思えないだろう。

そんな佐天の声も届かず、コロセウム内では二人が睨みあっていた。

「演武っつーから手加減しようかとも思ったんだけどよ」

「ん？」

垣根帝督の突然の口上に、藍藤静那は首をかしげる。

「やっぱ全力でぶつからないと面白くねぇ。ここはさ、お互い縛りをつけての全力ってどうよ？」

「縛り、か。じゃあこういうのはどうだ？　直接攻撃以外はみとめねぇ」

静那の口元が吊り上るのを見て、帝督も笑みを返した。
お互い、了承がいったらしい。
直接攻撃のみ。これはつまり、空気を操る攻撃や、直接見えない攻撃を禁じ手とすることだ。帝督の未元物質も、静那の法則解析も大きく動きを制限される。

「相手に害がないなら、能力の使用はいいんだよな？」
「あぁ、帝督が翼で飛ぼうが問題ない」
「よし、わかった。さっきのもある。借りは返すぜ静那！」

と、そこへ放送が入る。

『それでは皆様、本日は柵川中学にようこそいらっしゃいました。今から本日のメインイベント、ＬＥＶＥＬ５二人による演武を始めたいと思います！』

会場のどこかしこから、彼ら二人に対する声援が向けられる。

『それでは……開始！』

瞬間、二つの力がぶつかり合った。

@

「……何よ、これ」

御坂美琴は、目の前で行われる演武に目を奪われていた。

将来絶対に倒すべき相手……藍藤静那が今日ここで戦うというから、参考までに見に来た美琴であったが。

「相手は第二位、垣根帝督か……。どうなってるのよこの戦いは」

六枚の翼を展開して、レーザーを駆使しつつ翼での物理攻撃を狙う垣根帝督。

対するは何らかの付与を施したのか、足からブーストをまき散らしつつ空中旋回する藍藤静那。

垣根帝督が渦巻くようなレーザーを繰り出せば、藍藤静那はそれを素手で打消し。

藍藤静那が手のひらから直線状の竜巻を噴射すれば、垣根帝督はそれを翼で弾き飛ばす。

時たま翼と拳で打ち合い、はたまた遠距離から互いに狙撃の応酬。

「先は長いわね……でも、絶対に追いついてみせるんだから！」

目を逸らさず、少しでもこの戦いから何かを盗もうとする美琴の顔は、実に晴れやかだった。

結局、一時間に及ぶ戦いののち、双方疲れたということで今回は引き分けと相成った。だけれども、観客たちの目に不満はなく。

校長は安堵の笑みを浮かべていたそうだ。打ち上げられないでよかったな、校長。

０１９　ある日の法則解析（前書き）

この話から、時間が飛び飛びになると思います。

主人公ですが、原作知識がかなりあいまいになってます。そこをご了承ください。

019　ある日の法則解析

学園都市の第一位、白濁の男一方通行はその日、切れた缶コーヒーを買いに近くのコンビニまで来ていた。
もう既に日も落ち、暗くなった時間帯。黒地に不思議な模様を描いたシャツを着て、彼は店内を一路ドリンクのエリアまで歩いて行った。
店内も夏場にはありがたい涼しさ。ドリンクリーチインの扉を開けるともっと涼しさが体を包む。
だかそれは一般人に限っての話。すべてを反射する能力を持つ彼にとっては、暑いだの涼しいだのといった感覚は無いに等しかった。彼はそのまま手を伸ばし、缶コーヒーを手に取る。左手に持っていたかごに、次々と放り込む。
ガシャン、ガシャン、ガシャン……
「……あン？」

「ん？」
一方通行が違和感を感じて隣を見ると、同い年くらいの少年が立っていた。それはいい。一方通行にとっては全く関係ないことだ。だが。

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

一方通行は、すでにコーヒーを取る手を休めている。にもかかわらず。

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

「おぃオマエ。なンのつもりだ？」

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

少年がなぜか盛んに“ぴるくる”なる可愛らしい乳性飲料を、一方通行と同じようにかごに放り込んでいた。

一方通行のかごに。

「ん？」

「ン？　じゃねェだろコルァ！　なンのマネだって聞いてンだよ！」

「君のマネ」

「聞いてねェよ！　俺のかごに何入れてンだよ！」

「ぴるくる」

「だから聞いてねェよ！　なめてンですかァ！？」

「みりゃわかるだろ舐めてねぇ」

「聞いてねぇっつってんだろコルァ！！！」

息も荒く一方通行は怒鳴り散らし、対面する少年を改めて睨む。

全開にした学ラン、長めの黒髪、そして胸に下げたネックレス。

……面識はまるで無い。

「あぁ、かご間違えた」

「いやいやいやいや！　おかしいよなァ！？」

見れば彼の左手には、空のかご。

「……オマエ、ふざけてンだろ」

「いや、そんなつもりはない。悪かったな」

そう言って少年は一方通行のかごから次々と缶を抜いていく。…

…コーヒーを。

「……ちょっと待てや。オマエ、これじゃ俺がぴるくる大好きみてェじゃねェか！」

少年のかごには山のような缶コーヒー。一方通行のかごには山のようなぴるくる。

「あぁ、そうなの？」

「ちげェよ！？」

「今流行なんだよな確か。缶の大人買い」

「はやってンのかよ！」

自分が勝手にしていたことがいつの間にか流行ってるとは思わなかった一方通行。

「ほら、あそこの女の子も」

「あァ？」

目線の先では、ピンクのファンシーなワンピースを着たボブカットの女の子が……ビールの大人買いをしていた。

「ダメだろアレ！」

「さぁ。店員が止めるだろ」

唖然とする一方通行の横を、スキップしながら少女は通り過ぎていく。

「――小学生はまだ早いのよ？」

「――小学生じゃないのです！　れっきとした大人なのですよ～！」

「あれ？　買っていきやがった」
「免許証提示してなかったかァ？　あのチビ……じゃねェ！！」
「あん？」
「とりあえずコーヒー返せコルァ！」
「はい」

かごのコーヒーを一方通行のかごに流し込む少年。

「……面白ェよオマエ……最っ高に面白ェよオマエ！！」

プルプルと震えだす一方通行。

「だろ！？」

目を輝かせる少年。

「……ｙｊｒｐ悪ｑｗ」
「ん？　処理落ち？」
「ォォォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
「……っべー」

一方通行に言い知れぬ恐怖を感じた少年は、そのまま逃げだした。

「逃がすかァ！」
「お客様！　……勘定は払っていってくださいね？」

「次会ったら殺す」

少年……藍藤静那が最後に聞いた彼の声は、ソレだったらしい。

「……ヤバい、第一位怖い」
「お前がそんなふざけたマネするからだろ」
「だって帝督が視察して来いって言ったから」
「視察じゃねぇだろアレ。ゼッテェムカつかれてんぞ」
「じゃあ何か？　俺は今日死亡フラグを一個立ててきたってことか？」
「まぁ、そうなるな」
「マジかよ……偶然見つけたからって絡むのは良くないな」
「当たり前だろ。でもまさか、あんなにコーヒーバカ買いする奴だ

とは思わなかった」
「それは同意」

０１９　ある日の法則解析（後書き）

うん、書きたくなってしまった。
反省している。
一方通行ファンの皆様、申し訳ありませんでした。
感想の返信などはまたの機会にさせてください。

０２０　親友との出会い　前編（前書き）

アンケートの方は、次回か次々回に打ち切らせていただきます。
ご協力ありがとうございました。
アンケート、もう一つ出したいと思っておりますのでよろしくお願いします。

０２０　親友との出会い　前編

「超特売日超特価超特急です！」
「言ってる意味が分からない！」

朝食を下げたテーブルに、広告を叩きつける最愛サン。今日は日曜日、学校はお休みである。
彼女の視線は、いろんな意味で熱く俺を捉えていた。

「つまり……買って来いと？」
「超正解ですね！　兄妹の絆は超強いです！」

大仰に頷く最愛だが……え～。特売日ってアレだろ、元気いっぱいの学生が乱闘になりつつ商品を奪い合う日だろ？
別に金には困ってないし、わざわざ先輩方に混じって大乱闘スマッシュブラ〇ーズなんてまっぴらゴメン蒙りたい。てゆか最愛が行けばいいじゃんか……。

「えと……別にお金には困ってないんだけど……」

頬を掻いてそう言うと、最愛は憤慨したように言う。

「超違うのです！　もはや超絶と言って言いほどです！　ここですここ！」
「バシバシテーブルを叩くでない。ついでに自分に痛みが来ないからって能力使うな、テーブルが泣いちゃう」

ちゃっちいことに能力を使う我が妹に嘆息しつつ。彼女の指し示す箇所を覗き込む。

なになに……？

「デカビタG（ゲンキ）六本パックで２５０円？　最愛お前、栄養剤欲しい位の激務でもしてんのか？」

首を傾げると、最愛は大きく溜め息を吐いた。

「お兄ちゃんがここまで超鈍いと、私も超どうしていいか分からないです……」

「？」

最愛は、黙ってそのデカビタＧの広告欄、その注意書きらしきものに細い指を当てた。

そこには何やらビックリマークが多用されたコメントのようなものがあり、どうやら最愛はソレが目当てだったようで。

『大チャンス！　お買い上げの方先着５名様にはプレゼント！　西方シネマ一か月フリーパス！！』

「あぁ～……」

納得。

「わかってくれましたかお兄ちゃん？」

「なんでそんな上からだよ……」

つまりは映画館のフリーパスが欲しいんだろ。俺が一回連れてってからというもの、休日は大体映画めぐりに出かけてたからなぁ。でも、フリーパス欲しいって……お小遣い増やしてあげようかな。

自分の至らなさに少しため息。まぁいいさ。そういうことであれば。

「じゃあ、俺が買ってくるよ」
「本当ですか！？　ありがとうございます！　小学生の私にはさすがに超きつくって」
「まぁ、それはしょうが無いからな……。あすこのタイムセールは、戦争だ」

順番待ちなんてものは存在しない、ただの武力勝負。セール中はルールなんてものは何もない。火炎が、雷撃が、濁流が。マーケットを飛び回る。
そんなところに最愛を放り込めないしな。とりあえず、俺が行くしかないだろ。
……戦場か。スーパーで特売品のためだけに戦う。なんかの物語であったな。
考えてみれば、俺の大好きな“バカなこと”じゃねぇか。
そのために本気になる。面白い。

「あすこのスーパー、何時からだっけ？」
「１０：００開店だったと思います。お兄ちゃん、超良い笑顔ですけど」

若干、楽しみになってきた俺が居た。

@

後になって彼は語った。あれほどまでに荒れた特売日はなかった、と。

彼――上条当麻はその日、栄養剤六本パックを求めてとあるスーパーへと来ていた。

別段変わった日でもなかった。もうそろそろ秋も本番になろうかというくらいの、何の変哲もない日曜日だったと記憶している。なのに。

「不幸だぁあああああああああああああああ！」

「それを寄越せェウニ頭ぁあああああああああああああああああ！」

六本パックを抱えて走る彼を、ボサボサの黒髪少年が追う。……否、黒髪少年“達”と言ったほうが正しいのだろう。どんな原理かは知らないが、周囲の野菜が宙に浮き、少年の意のままに上条当麻に向かって飛来する。

「音速超えて突貫するニンジンってなんなんだよ！」

「ニンジン型爆撃機Ｎ－４５だ」

「ご立派な名前だことでえええええええええええええ！」

知らぬ間に緩んだ涙腺から、滝のような涙が溢れ出る。慣性に従って後方に流れる水滴が、彼がどんな速度で逃げ回っているかを感

じさせるのだが……。
そんなときである。上条当麻の目の前に、もう一人少年が立ちふさがったのは。

「そこのウニ頭！　それを俺に渡せば無事で済むぞ！」
「本当ですか！？　それは助かりまs……って危ねぇ！　これ渡したら意味ねぇ！」

危うく手渡すところだった六本パックを抱きかかえる上条当麻。彼にとって、この栄養剤は命綱にも等しかったからである。
度重なる不幸に立ち向かうため、栄養剤は必須。……今回も不幸体質が災いして最後の一個を友人と奪い合ったばかりなのだ。絶対に渡せない。
その光景を見た目の前の茶髪の少年は舌打ちする。

「なら、仕方ねぇ」
「ひぃ！？」

いきなり勢いよく三対の翼が生える。上条当麻は腰が抜けるのをやっとのことで堪えた。

「な、なななな……」
「おい帝督！　なんのつもりだコルァ！」

と、後方から先ほどの野菜爆撃機もとい、ボサ頭の少年が追いついてくる。
上条当麻は前後から挟まれた形になった。もう、帰りたいです。割と本気でそう思ったのを、前後の少年達は知るはずもなく。

「フッ、俺も栄養剤が欲しいんだ」

「嘘こけ！　お前ほど栄養が満ち足りたヤツをしらねぇよ！」
「お前こそ、毎月５０００万だったっけか？　研究費貰ってんだろうが静那」

なんとなく、この世の理不尽を痛感した上条当麻であった。

「俺は最愛にフリーパスをあげる約束してきてんだ！　早くそれを寄越せウニ頭ぁあああああああ！」
「みぎゃあああああああああ！」

ほうれん草、にんにく、玉ねぎ、小松菜……ありとあらゆる野菜が飛来する。

「オラオラいつまで避けてられるかな！？　なんならドリアンと納豆も操んぞコラァ！」

それは本気でやめて！　と上条当麻は思った。
と、その瞬間。

「甘いな……喰らえ！」
「うわあああ！」

正面の茶髪の少年が、翼からレーザーを繰り出す。

「不幸だぁあああああああああああああああああああ！」

堪らず脇道に逸れて上条当麻は逃げ出した。

「「逃がすかぁ！」」

@

なんとか逃げ延びた上条当麻が、先に出会ったのは垣根帝督であった。

保存食売り場の間道を抜けたところで、ニヤリと笑って立っていたのである。

「もう勘弁してください！」

「じゃあソレを寄越せ」

「なんでそんなにこれが欲しいんですか！？」

「別に、それが欲しいんじゃねぇよ」

「は？」

一瞬思考がフリーズする。

「え、と？」

「いや、ただ単に俺がソレをゲットして、静那がゲットできない。その優越感に浸るだけ」

「最低だこの人」

「てゆか楽しんだよ。アイツ貶めんのが」

「友人なんじゃないんですか！？」

「親友だな」

「言葉の意味分かって言ってます！？」

「もちろん」

「概念がトチ狂ってるとしか思えない」

「だから寄越せ」

「いやいやいやいや接続詞の使い方が甚だしくおかしいでしょ！」

「交渉決裂だな。奪い取る」

ここまで理不尽な会話をしたことがあっただろうか。

上条当麻はそう自分に問いかけた。

「不幸だぁああ！」

「あ、待てコルァ！」

そのまま、また死角をうまく使って逃げ延びることに成功した上条当麻は、今日何度目かの不幸に出くわすことになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6467w/

とある無敵の法則解析《アナリーロウ》

2011年11月28日04時51分発行